



164号

戦い終わって夜が明けて

●統一地方選と私 納富育代・大貫淑子
木村京子・坂下康子・佐竹久美子・原輝恵

ピース・ピルグリム

●市民が見た戦後の湾岸（続き） 斎藤千代

フィリピン再訪問 奥川 睦

今月の編集〈あごろ〉新宿



目次



●新しい朝に乾杯	1
●戦い終わって夜が明けて	2
納富育代 大貫淑子 木村京子 坂下康子	
佐竹久美子 森田イツ子 原輝恵	
●個人と国家 川名紀美	16
●フィリピン再訪問 奥川 睦	17
●住民票差別反対裁判 敗訴はしたけれど 田中須美子さん	23
●河野嘉子さん逝く	26
●集会から	28
●あごら読書室	32
●あごら試写室	34
●ピース・ピルグリム 斎藤千代	35
●拠点会議の報告・あごらのあごら	112



新しい朝に乾杯！

参院選で女性議員が大量進出、保革逆転したとき、政治にも新しい風が……と女たちは喜び勇んだ。参院選ほどではなかったが、衆院選でも女性議員数は大幅に伸びた。九一年統一地方選も、やはり女性の議員数は伸びている。参院選や衆院選のような「山が動く」勢いは、なかったけれども……。

それにもかかわらず、政治は今、お先真っ暗な感がある。女性旋風の原点になった社会党が統一地方選に惨敗したのは「原理原則が非現実的だからだ」とジャーナリズムが報じたことを受けて社会党が大きく右に方針を変えようとし、その間隙を縫って小選挙区制が着々と進められようとしていることに不安を覚えている人が多い。

地方選で多くの有権者が社会党に票を入れなかったのは、社会党の護憲・非武装の原理原則を否定したわけではない。具体的な行動が主張する原理原則と一致しないこと、間髪を入れず行動してほしい時に行動しないことに、焦立ったのだ。その市民の皮膚感覚を受けとめようとせず、いま最も大きな問題である平和憲法の空洞化や政治改革と称する利権政治の推進を阻止できないようなら、社会党は、従来の支持者をも失うことになるだろう。野党退潮の中、原理原則を鮮明に掲げて女たちの手づくり選挙を貫き通した市民グループは、各地で圧勝した。不戦を貫く明快な論旨と行動力、みずみずしい生活者感覚を市民が評価したからだろう。一方、個人としては十分すぎるほどの力量と資質をもちながら、政党の看板を負って涙をのんだ人もいる。さまざまな問題を改めて考えさせられた今度の選挙だった。

『あこら』一六一号でご紹介した方々の全員当選は果たせなかったが、全員が善戦した。出馬したこと、たたかったことが、各地の風景を変えた。戦いすんでも日は暮れない。当選した方、惜しくも敗れた方、それぞれの「朝」に乾杯！

(斎藤千代)



戦い終わって夜が明けて

——統一地方選と私

町はきつと変わる！

納富 育代

ねらい通りのトップ当選を果たし、町政初の女性議員となってひと月。最近やっと、よくやりあげたものだ、しみじみその喜びをかみしめられるようになりました。

自分の人生で、こんな体験をすることになるとは、昨年末まで全く考えたこともありませんでした。しかし、立候補すると決めたからには絶対当選しなくてはと、街頭演説やJR駅での朝夕の挨拶、あちこちのミニ集会や個人演説会など、生まれて初めての選挙戦をやり抜きました。カンパとボランティアに支えられた私たちの選挙は、この町の今までのやり方とは全く違う形の選挙でした。地縁も血縁もなく、いわゆる、ジバン・カンバン・カバンの何一つなく、あるのはただ、町を変えたい、議会に新しい風を、との女性たちの熱い思いだけでした。誰もが初めての体験だったのに、やってよかったと、ネットワークのメンバー全員が感じていました。だから、最後まで明るくさわやかに元気よくやれました。事務所も食事などの差入れがどんどん増えて追い込みになるほど盛り上がりました。

その中です。この感動を何度も味わいました。そして、その感動の総仕上げが千九百二十三票という古賀町始まって以来の得票でした。ある人が言ってくれました。「自分は今まで、なせこんな町に引っ越して来てしまったのだろうと後悔していましたが、今回の結果を知って初めて、この町に来てよかったと思いました。このままではダメだと感じている人たちがこんなにいることを知り、これからの古賀町に希望が持てるようになりました」と。

さあ、これからが本当のスタートです。『あこら』一六一号での公約どおり、自然・こども・福祉を大切にする町政をめざし、女性の視点を生かした活動をネットのメンバーと一緒に始めます。それともう一つ、議会での様子を皆に伝え、町政を開かれたものにしていくこと。四年間これをきめ細かく実行していけば町はきっと変わる、と確信しています。

(福岡市 古賀町 町議)

今回の選挙で見たこと

大貫 淑子

太陽エネルギーの宣伝カー

告示の日には既に戦いは終盤戦、告示から投票日までの宣伝期間は単なるセレモニーであり、最後の票固めの時期だ。多少の陳腐さを感じながら私は選挙カーに乗った。



反原発派を自認するわが選対は、宣伝カーの屋根に太陽パネル二枚を取りつけて、「太陽のエネルギーで皆様に声をお届けしています」とアピール。原発は子孫にツケを残す。だから自然エネルギーを！と、脱原発の表現として太陽光発電を利用して選挙戦に臨んだわけだ。マスコミはすぐ追いかけて報道してくれたが、票にはつながらず、次々点に終わった。

市民の日常生活には直接エネルギー問題は関係ないのだ。三月議会もそっこのけで挨拶廻りにせいを出して握手して廻った候補者のほうが票をかせいだ。四年間議会で一言の発言もなかった自民党の議員たちが新人三人も含め、完勝した。不動産関係の候補者は金をバラ撒いて直前まで私服が二人組で調べて歩いたそうだが、誰も逮捕されなかった。逮捕要員まで決めていた陣営もあったそうだが捜査当局は既に解散してしまった。

政治地図が書き替えられた

国立市は近年類をみない激戦で落選組は全員革新系（社現一、推一、元一、革無現一、新二）とあって、市民運動をやっている人たちは一様にショックを受けた。政治地図がいっぺんに書き替えられ、十三対十三が十九対九と大きく変わってしまった。当市は今まで公立小・中校に一旗も日の丸が上がらなかった地域として全国に知られている。これから他市と変わらなくなってしまうだろう。

地上げ屋議員が街をカッポし、高層マンションが建ち並び、計画道路の建設が促進されよう。そして南部農村地帯の緑が削られて開発が進むことだろう。「文教都市国立」も一皮むけば保守の街。地縁血縁、利益代表、組織が勝った今回の統一地方選ではなかっただろうか。

市民派のかなしさ

私は「誰もが安全で安心して暮らせる街づくり」を訴えて選挙戦をたたかった。生活者の視点で生命を守る立場での発言は空振りに終わってしまったが、五百人の支持してくれた市民には全く申しわけなく思っている。年四回『くにたち21』（議会報告を兼ねた機関紙）を発行し続け、議会ごとの一般質問も勉強して毎回三〇四点問題提起してきた。選挙は「技術」が必要と思うが、それにしても市民の議会傍聴も少なく、努力してきたことが水泡に帰し誠に残念である。今回革新の乱立を押さえることができなかったのが敗因の一つと思うが、共産党のようにきちっと票割りができないのが市民派の悲しさである。今後の課題だと思うが、これは至難の技である。

今回市長選も同時に行われたが、候補者を市民派が擁立し、社・共が推薦をして形としては誠に理想的だった。が、市長選にかかわった候補者が全員落選してしまったのは皮肉としか言いようがない。共産党を除き、市長選をさけてひたすら自分の当選することのみ



に奔走した候補者が楽勝し、つまり革新の連帯にそっぽを向く候補者のほうが選挙戦で強いのは全く納得いかない。私利私欲の強いほうが選挙戦には強いという実態が露呈して、これでは政治がよくならないのは当然と思うことしきりである。

男の論理がまかり通っている

当市は女性市議がずっと四人であったが、今回も私と生協出身者が交替した形で数は変わらなかった。議会運営もそうだが選挙戦全般も男の論理がまかり通っていると感じざるを得ない。私の選対も男性が中心をにぎり、女性は協力者。生協にしても主婦を擁立するが、上意下達、上からの指導であることは広く知られているところだ。組織拡大が彼女たち、いや彼等の至上命令だと感ずるのは果たして私だけだろうか。そのところに男の論理が見え隠れしているように思えて仕方がないのだ。今回の統一選で草の根市民運動派が生協に吹き飛ばされてしまった地域が多かったと聞いている。

女性の政界への進出は地球環境が破壊され、生存基盤が損なわれている現在、今後ますます期待されるところだが、女性たちが本当の意味で主権者としての自覚を持ち、党派をこえて市民派どうしが真に手を結んで政治参加したその時にこそ、日本の政治は大きく変るに違いない。

(前国立市議)



元気を寄せ集める女たち

木村 京子

福岡市（東区）市議会選挙の結果は、二百十票差の次点（五千六百六十五票、得票率五・三％）という「完敗」でした。打って出る新人としては、投票日当日の嵐のような悪天候で、前回に比べて、一〇％近くも低かった投票率というのは不運だったのかもしれない。だが、この結果については選挙運動の一つの結果として納得しています。敗因につながることはいろいろありますが、直接的には、地元利益誘導型の村型選挙の壁を破り抜くには、パワー不足ということです。

とはいえ、市民運動や生協運動などの具体的・実体的な活動の中からの政策をかかげ、「人工島計画」「原発（美浜二号炉の事故がありました!）」「湾岸戦争」など、リアル・タイムの「市民と政治、暮らしと政治、女性と政治」の問題を投げかけた結果としてはまずまずでしょうか？

市民運動のネットワーク的な（木村京子とともに政治をつくる会）が政策や運動スタイル、選対機能のほとんど全てを創り、経験不足や時間の制約の中でもやり抜いたことの自信は大きいと思います。その上でこれから、「もともと政治はみんなのもの」ということをもっと豊かにメッセージすることを、普段の市民運動の中で実現していきたいと思っています。

支援の労働組合（社会党推薦でしたから）型の運動とはいろんな摩擦もありましたが、婦人部有志の女性選対は週末ごとの街宣を二か月以上もこなし、力強いものでした。生協への波及力がもう一つ広がるための時間切れが一番残念なことでしたが、「政治をわかりやすく、身近なものと感じることができた」という女たち、むしろ市民運動のふたまわり外ぐらいの人たちが熱く戦ってくれたことが、この選挙の大きなポイントでした。

水も空気も食べ物も生まれることも働くことも死ぬことも政治とのかかわりを抜きにすることはできないし、無関心にさせられたままでは、政治は私たちを押しつぶすものになっていく現実の中で、私たちの「元氣さ」を次々と寄せあつめていくために、女たちよ！また、やりましょう！

（一九九一年五月二六日）

福岡だけでなく、全国の友人、知人から、物心両面のお力添えをいただきました。ありがとうございました。残念！です。

女性が男性と同じ土俵で

坂下 康子

四月七日、午後十一時三十分すぎ。五人区の四番目に当確が出て、当選が決まった。

宮城県議会では、初めて女性県議が二人になったそうである。

私の場合は、父親と娘の「親子県会議員」ということで、マスコミにとりあげていただ



く機会が多い。

当選の感想を聞かれて、つい「父親と岡崎トミコ代議士、そして皆様のおかげです」と答え、皆様を最後にしてしまったので「コイツ何か勘違いしている」とか「まちがっても父親のおかげなどというもんじゃない」などのお叱りを受けたりもした。性格的に、直情型で、頭に浮かんたままを口にしてしまう私の第一番目の失敗である。

最終得票、八三三四票をいただき、宮城県で一番若い（三十二歳）県会議員として、これから、見たもの、聞いたこと、すべてが勉強の日々である。

いろいろな人のいろいろな意見にじっくりと耳を傾け、一つ一つ整理をしながら、冷静な判断でことを進めていく必要があると思う。

いわゆる「生理的な」感情で人物を判断したり、好きだ、嫌いだの感覚で、物事を限定したりすることもできるだけ避けたい。

好きという字、嫌いという字には、女が使われている。こういうところにも、世の女性に対する認識が出ているような気がするのだ。

ともかく、私は正直、「女が、女が」というセンテンスは好まないけれど、これからの世の中、女性が男性と同じ土俵で、バランスのとれた公正な感覚を持って、物事に対処していくことが、本当に必要とされていると思っっている。

その同じ土俵に女性をあげていくためにも、女性として、議会の代表者として頑張らなくてはならない。



“やっぱり女はダメだ”なんて、絶対言わせないよう、せっかくの活躍の機会を一生懸命活かしていきたいと思う。

(宮城県議会議員)

選挙雑感

佐竹 久美子

一九九一年四月七日という日は、初めての選挙で当選という意味で、私の生涯において、決して忘れえぬ日になりました。

市議選立候補の話があり、女性ですから家族との関わり方に大きな変化が起るわけですし、組織や資金の面での悩みもありましたし、政治的経験を持ち合わせていないということから、私にとり、人生において幾度か訪れる転換時の中で、まさしくかなりの重みを持った選択であったと思います。

しかし偶然性の中に、私だけが持ちえる可能性があるのではないか、もしかしたら、それも今の政治を変えていくいくらかの原動力になるのではないかと決意に至ったわけであります。

そして選挙戦を、体力と気力の限界の中で挑み、当選という感激を味わい、私の新しい道がスタートしました。

私にとり、すべてが初めてのことですから、やはり大変な毎日です。しかし投票してく

れた方々の、私に対する期待の気持ちを強く受けとめて歩んでいきたいと思っています。市議会のマンネリ化に埋没することなく、政治の視点は生活者「市民」にあることを忘れることなく、弱い立場にある、子ども、高齢者、障害者に対し政治の光をあてていくために、たゆまぬ姿勢を持ち続けていきたいと思っています。また、女性の社会的、政治的参加を広げ、被扶養から扶養する立場への脱皮が図れる道筋をつくるために、立ちふさがる問題の解決に向け努力していきたいと思っています。

社会が政治が変わることを望んでいる多くの女性の皆様、それぞれの場で女性の輝く感性を表面化し、躍進されることを期待いたします。

(仙台市議会議員)

今や議会は生活派一色

森田イツ子

生活者ネットワークは、主に「生活クラブ生協」の組合員有志で構成し、代理人の歳費管理（歳費を全額拠出し、活動費のみ支給）と政策立案する政治団体です。

今回の統一地方選では東京全体で二十六名の候補者を立て、二十二名が当選しました。四年前の総得票数三万九千三百四十六票に対し、六万二千九百四票と約一・六倍の票を獲得しました。私たちは、議員を代理人と呼び、政治を「生活を豊かにする道具」ととらえ、プロの政治家にお任せでなく、市民の代理人としての議員を出す運動を広げています。



四年前の統一地方選では、十二人が全員当選し、マスコミにも大きく取り上げられ、女性の議会進出に大きな役割を果たし、政治の流れを生活重視に変えたと自負しています。家族の健康のために安全な食物の共同購入から、食品安全やゴミ問題、水問題など環境問題へと発展し、生活クラブでの実践活動の上に立って政策立案し実現してきています。代理人は現在東京で三十人、全国では六十九人になりました。世田谷区では一人から二人、今回は三人（長谷川かず子、森川礼子、森田イツ子）当選できました。世田谷の女性議員は、五十五人中八人ですが、その中の三人が生活者ネットワークです。議会においては食品添加物や農薬の問題を取り上げた質問に「そんなこと言っていたら食う物が無いよ！」ゴミの問題では、「都の問題だぞー」などヤジっていた議員がその後同じような質問をし、今や議会は生活派一色？と言っても過言ではありません。

区議会では女性差別はそんなに感じられませんが、自民党議員の中には、一寸さわらせよとか、女は男に侍るものとの行動に出る議員が二、三人います。平和問題についての質問には、自民党のヤジは恐ろしいほど右翼化します。

私たちは今回三人で会派形成（世田谷は四人以上）に及ばず。政治の世界は数は力なります。今後は会派形成を目指し、民主主義の原点である市民自治の実現のため他団体とのネットワークキングを進め、行政に発言していきます。

（世田谷区議会議員）

成熟した市民社会をめざして

—— 一有権者として思うこと

原 輝恵

第百二十回通常国会での「消費税見直し法案」や、憲法を無視した自衛隊法の拡大解釈による掃海艇出動の決定など、私たちの意志が反映されているとは思えない状況である。こうした現象も昨年の総選挙での自民党の大量当選を許したことによるものである。

八九年の都議選とつづいて行われた参議院選挙で、野党及び市民派の女性議員が多数当選し、いよいよ市民主体の時代が実現されると喜んだ。長い間の市川房枝氏等の婦人参政権獲得の運動が実って四十五年、日本の政治風土もやっと成熟した時代が到来したのでは、と期待したのである。しかし、九〇年の総選挙や、今回の統一地方選挙では再び自民党に有利な選挙となってしまった。

ただ、今回の統一地方選をみていくと、環境や生活の問題を訴えて着実に議席を得た、市民派の女性議員の善戦も目立ち、成熟社会への一步は進められているのではと思う。

市民の自覚が広がりつつあるが

こうした政治の場へ共にたたかって仲間を送り出す自覚した市民が広がりつつある一方では、相変わらず金権選挙や違反も後をたたない現状である。渋谷区議選での女子大生に

よる替え玉投票などは、有権者としての認識以前の問題であり、人間としての成長発達の段階で当然獲得しておくべき基本的なこと、有権者としての自覚が、大学生になってもなかった幼稚さこそ問題ではないだろうか。人が成長する中で、一人前の人間になることができない現実の社会環境を考えてみる時、教育やマスコミのありようも含めて、意外に根深い社会病理の現象かもしれないと思われるのである。

また選挙に莫大な費用をかける金権選挙や買収などによる悪質な違反、——投票から一か月以上も経つのに町長が決まらない奄美の伊仙町の問題など、法律の強化に俟つところもあるが、地域住民の自覚した運動の中では正していくことも大事である。

前にも述べたように、少しずつ広がりは始めている市民の中から選ばれて立候補する型の市民派選挙が、今後いっそう広がっていくことに期待できるのではないだろうか。そしてこのような選挙にかかわることで市民はいっそう政治を身近かに感じるができるし、生活と政治を結びつけることを実感として理解していけるのではないだろうか。

それにしても私たちの日常の暮らしの中の課題と政治との結びつきへの理解が少ないと思う。たとえば今回の湾岸戦争に反対する人たちはたくさんいたし、デモや集会でも毎回大勢の人たちで賑やかであった。この戦争に反対する意志は、今回の選挙での投票行動にどう結びついていったのだろうか。投票率の低さや、自衛隊の派遣に賛成した政党が得票をふやしたことなど、政治と結びつけて考えているのだろうかと疑問である。

政治と生活を結びつけるには

政治を生活と結んで考えるためには、学習することも必要であろう。生涯学習の時代といわれているが、単に学習を自己啓発の段階にとどめないで、地域の仲間と共に学ぶ場をつくっていくことも重要ではないだろうか。

私たちは目黒区の中で「みんなで考える土曜講座」を始めて四年目を迎えた。この中は講義を聞いて考えるだけでなく、地域で地方政治へ働きかける問題を提起している。またグループの人間関係も大切にして、時には音楽を聴く会や一泊の旅行もいれて楽しい運営も心がけているのである。今年三月には「目黒で湾岸戦争を考える会」を区内の団体に呼び掛けて実施し、ネットワークも広がってきている。

このような地域の地道な学習と運動を通して、生活と政治を見直せる力量をもち、市民として成熟した社会をつくる一人になることをめざしている。

いろいろな地域でも、私たちのような学習活動をしているグループも多いと思われるので、こうしたグループどうしが情報交流のできるネットワークづくりができれば、さらに発展していくのではないだろうか。

このような発展をめざしながら、地域での学習活動をつづけていきたいと思う。

個人と国家

川名 紀美

そのテレビ番組を見たのはアメリカ・アーカンソー州の小さな町、バイングラフのジム・ウィルソンさんの家だった。湾岸戦争がまだ、続いていた二月上旬。サウジアラビアへ行くことを拒否した陸軍の女性兵士と、行くべきだと主張するその父親を中心に、白熱したテレビ討論がくりひろげられていた。

「こらんなさい。これがアメリカですよ」

ジムさんが胸をはった。傍で、妻のドロシーさんも深くうなずく。

「彼女は堂々と自分の意見をいう権利をもっている。父親も同じ。そのことで、誰からもとがめられることはない。こんな自由と人権が、人間にとってどれほど大切か。私たちはこの自由をクウェートやイラクの人たちにも享受してもらいたいのです」

ウィルソンさん夫妻の七人の子どものうち、たったひとり娘、ドロシーさんは海兵隊員として、サウジアラビアで戦っていた。湾岸戦争は、これまでで最も多くの女性兵士が参加したことから、「女の戦争」と呼ばれていた。私は女性兵士を送り出している家族の心情を知りたいと、知人に紹介

してもらってジムさんとドロシーさんをたずねたのだ。

古いカントリーハウスをていねいに修理した家の玄関には、星条旗がひるがえっていた。室内に置かれたアンティークの家具類は、ジムさんがガレーセールなどで買ってきて、使えるように手を入れたのだという。キッチンにはドロシーさん手づくりのジャムやピクルスのびんが並んでいた。

ジムさんは、電気技師として、働きに働いた。ドロシーさんは、主婦として心から子どもたちを愛し、育てあげた。しかし、白人でも子どもたちの一家の経済状態では、子どもたちを大学へ進学させることができなかった。七人のうち、五人までが軍隊へ。技術を身につけたり、大学進学のための奨学金を手に入れるためだ。

二十六歳のグレースさんは、結婚したばかりのプエルトリコ人の夫を残して、戦場へ行った。

ジムさんやドロシーさんが、「正義」「不公平は正さなければ」というとき、私は心から共感することができた。グレースさんの結婚でもわかるように、身の周りの不公平や差別をなくす生き方を積み重ねてきたからだ。アメリカにはきつと、何十万、何百万人のジムさんやドロシーさんがいるのだろう。ただ、一人ひとりの善意や正義が国家にからめとられるとき――それを恐れずにはいられない。

(朝日新聞大阪本社学芸部)

フィリピン再訪問

—— ソーイング・プロジェクト

奥川 睦



魚よりも、魚の採り方をプレゼントしよう

こんなに早くこの地へ戻って来れるとは思わなかった。と言っても、のんびり実現できたわけではない。普通の生活人の感覚では、聞くだけで疲れてしまうという慌ただしさの中で、私はいつも旅立ってしまう。昨年四月、マニラでの『国際女性会議』もまさにそうだった。

あれから一年半、いろんなことがあった。新しい仕事についた。下の子どもたちは反抗期。母は高血圧に倒れ、御亭主殿は単身赴任。私はといえば、さまざまな無理が重なって体調をくずしダウン。おまけに更年期とのダブルパンチ。めちゃくちゃな歳月だった。考えあぐねた末決心した終のすみか。忙しさは、いやが上にもつった。でもその間も、会議で受けたショックとイザベラの農村婦人たちの貧しく苦しい生活状況は、私の心にへばりついて離れなかった。

援助は、どこかピントが合いにくい。最近とみに悪名高いODAを引き合いに出さなくても、フィリピンの現状では、何をしても焼け石に水と、豪語してはばからない人が大半だ。考えれば考えるほど、根本的に解決しなければな

らないことが多すぎる。政治や経済の基盤がガタガタだし、軍の反乱勢力はくすぶりつ放しだ。富めるものが、すべて富を吸収してしまうような社会構造や土地政策にメスの入れようのないまま、それらがひずんだひどい貧しさがある。当然の結果として、貧しい人々はますます貧しくなってゆくしかない。何という悲しい現実。打つ手はないのか、と絶望的にすらなる。

一九八九年四月、マニラでの一週間の会議の後、参加者がそれぞれ、用意された中から希望の地を選んで出かけた。IFFM（インターナショナル・ファクト・ファインディング・ミッション―視察旅行）で会った北部ルソン、イザベラ州の女性たちは、貧しいけれど生きている、という印象を私に与えた。

鶏が、十数羽のヒナを従えて家と家の間を歩きまわっている。豚が寝そべり、カラバオ（水牛のような角をした農業用でもある牛）が水を飲んでいる岸辺で、炎天下、二人組になって男たちが……のんびり丸太をギーコギーコやっている。その河で、水浴中のカラバオといっしょに私も泳いだ。猫も犬もガリガリにやせていて、いたわしいほどののだが、縛られていないし、人間がアクセクしていない分、

目が輝いている気がした。

会議当初、先進国の非をならし、糾弾するのにきゅうきゅうとして見るように見え、ついて行けないナーと思わせたガブリエラの人たちが、互いに胸を開いて話し合ってみると、自分たち自身の問題を、しっかりとらえ、理解、分析した上で、現実的に処理すべく、勇敢に（時に生命をとって）立ち向かっているのがわかったことも私に勇気を与えた。

ズルさや甘えを助長してしまうだけの援助ではダメ。そこに住む人のくらしを破壊したり、住民を分断やイガミ合いに誘う危険にも細心の注意を払いたい。本当にその人たちのためになる何かを見つけなければ。その一念で幾晩も幾晩も話は続いた。『魚をプレゼントするのは良い。でも魚のとおり方を教えてあげるのはもっと良い』の心境で、セルフ・リアイランス（自助努力）の具体策を模索、最終的に到達したのがソーイング・プロジェクトだった。

全フィリピン農村婦人労働者組織アミハンのイザベラ支部アンビの事務所にミシンを置き、村の貧しい婦人を集める場として使う。技術指導はそれほど難しくない。問題は資金だ。というところまで煮詰まった。長続きしないブラ

ンは、日常生活を掻き乱すだけ。長期間見通しをたてゴーサインが出せるまでの細部プランを練ってもらうべく、手持ちのドルとペソを当座の連絡費用にと託し、あわただしく帰途についた。着いたのが、百周年行事を抱えた子どもの学校の役員をしていたPTA総会の当日の朝だった。

資金あつめ

イザベラの地で、この人を窓口にすれば間違いないと思わせる若い農村指導コーディネーター、ジージーに出会った。私の見込んだ彼女だけあって、しばらくして届いたぶ厚い封書には、心のこもったお礼状が添えてあり、几帳面な彼女の性格そのままに緻密な計画書が六枚、立派な英語で綴られていた。何度も現地の女性たちで集まってミーティングを開き、話し合った結果だという。

イザベラの地形、環境。そこに働く農村婦人たちの現状と問題点。それをどう乗りこえ克服してゆくか。そのためこのソーイング・プロジェクト（縫製事業）をどう推進し、地域全体の女性たちの生活のレベルアップをはかるか。具体的な対象の絞りこみ、見込み利益の配分に至るまで、

かゆい所に手の届く気配りが感じられた。

それでも募金をつくる働きかけをやるべきかどうか、しばらく悩んだ。やるとすればどういう形でやるか。やる以上は、領収書やお礼状、報告書の作成・送付などきちんとやりたい。が、ただでも抱えることの多さに自爆してしまいそうな己の現状と、どう折り合いをつけてゆけるのか。考えることはとめどもなくあった……。

壊す家をワープさせフィリピンまで送れるものなら、スラムの人々にさし上げたかった。いっそ新築などという贅沢をやめ、このプロジェクトにつき込めないかと家族に提案してみたりもした。「それは話がきれいすぎる。君の道楽の範囲にとどめるべきだろう」と、比較的ものわかりの良い夫にも反対された。

でも結局は案じるよりも産むが易し。良き友にめぐまれ、宛名書きからチャリティー・ガレージセールまですべてテキパキと進めていってもらった。新聞に載せ、呼びかけてもらった効果もさすがあった。たまたま風邪で臥せている日と掲載日が重なり、朝から鳴りつ放しの電話の応対にうれしい悲鳴をあげたりもした。

それでも、当初、額は意外に伸びなかった。繁栄日本の

足元を見つめ直す視点を確認しながら、お金や物にこだわ
るのではなく、地球の一角にこういう現実があるというこ
とに目を見開いて欲しい。たとえコーヒー代一杯でもと、
少額を強調しすぎたかと現実的に反省もした。とにもかく
にも、四十万という大金がたくさんの人の善意の結晶とし
て手元に集まった。

どうやって届けようかと、これも一苦勞だった。手紙の
やりとりも回を重ね、確実に送金が届く窓口を知らせても
らってはいた。でも途中紛失が心配になり、一度は東京ま
で持参してジャーナリストでフリーピンへ行く友人のその
また友達に託すことにした。のどから手の出るほどお金が
ほしいガブリエラに渡したのでは、イザベラまでは届かな
いかもしれないと、結局はまたまた持ち帰り、無理を承知
で組んだ日程で九月初めフリーピン再訪とあいなった次第
である。

「直接手渡さないと届けた実感がない。浄財を寄せてく
れた方々への責任が果たせない気がする」そういう私に、
「ほんと、日本人の感覚じゃネ」と友は笑う。国際小切手、
国際為替、現地に口座を開いて振り込み、そこへ取りに行
ってもらう方法。いろんな方法があることはわかったが、

何となくどれも頼りない気がしてしまった。

同行の友は、夫に、「旅費（一人分約二十万）を上乗せ
して送金した方が合理的なんじゃないの？」と、皮肉を言
われた由。「遊びもかねて行くの」と彼女は答えたそう。
私も同じようなセリフを夫に吐かれたし、いく人かの友に
「旅費自分もちじゃ、仕事とはいえんネ。道楽じゃネ」と
からかわれた。家族にとってはまっこと、お母さんの勝手
な遊びで、でしかないと肝に銘じているつもりなのだが、今
回は計画変更を余儀なくされたので、イザベラへは行けず、
セブへ行つて熱帯魚と泳ぎまくって真っ黒になって帰って
来るといふ、まさに本物の遊びになってしまった。ま、こ
れも命の洗濯で、大事なこと、と言いわけをしておこう。

イザベラは遠かったが

しばらく連絡のとだえているイザベラと出発前にどうし
てもコンタクトをとっておく必要があった。国際電話をか
けようと思うのに、引越荷物の混乱で電話番号がわからな
い。会議の折の参加者名簿だけはすぐ出せる所に入れたつ

もりだったのに。ギリギリになってやっと見つけた場所は、やはりあるべき所。ダイヤルしたマニラのガブリエラ本部。受話器の向こうに現れたのは幸運にもネリア・サンチョ。

先の国際会議でも議長をつとめていたスペイン系の大型美人だ。何せマラカニアン宮殿前でラリーをやった時も、マスコミ陣がワツと（といっても日本とは違いバラバラ）彼女を被写体としてねらっていた。それでいて実に心優しき肝っ玉母さん。子どもに好かれる（自分が子どもなだけとも言われる）私は、彼女の娘アナともしっかり親友になつて、可愛い猫のクリスマスカードまで送った。

元氣か、その後どうしてると、結構長い電話になつてしまった。空港への出迎えと、その後のホテル一泊分をとりあえず頼み、イザベラとの連絡を依頼する。この件だけはしつこく頼み、再確認再依頼までしていたのに、着いてみるとイザベラとの連絡は何もとれていなかった。

国際間コンタクトはとれるのに、国内の連絡はとれないというのは、いかにもフィリピンらしい。「何せプロビンス（地方）のことだから」と独特の抑揚でマニラの人たちは言う。プロビンスと複数形で総称し、かけ離れた場所を強調しているように響く。物理的に距離があることや、

道路・交通事情の悪さをさし引いても、日本のものさしでは測れない不思議な、
「どうにもならないヨ」というムードを漂わせる。まるでそれ以外いっさい説明は不必要と言わんばかりに…。

そういえば、イザベラ初訪問の時も実にフィリピンらしい体験だった。その日、朝四時前にたたき起こされた。最後の晩だからと、つもる話に寝たのは二時をまわっていたというのに。ホテルの前からタクシーでバスターミナルへ。駅の汚い食堂でフィリピン風ヌードルを胃に流しこみ、ひとしきり待つ。こんなに待つのなら、あんなに朝早くからたたき起こさないでもよさそうなものなのにと思いつながら、あげくに、バスはここから出ない。もう一つのバスターミナルへ行くと、排気ガスと喧噪の中、タクシーでまたまた移動。……結局バスが出たのはお昼をだいぶ過ぎてからだった。

バギオ市周辺の大地震被害が報道され、復興の立ち遅れで幹線道路が遮断されていることは承知していた。ちょうどメトロマニラとイザベラの間地点だ。でも自分が出かけるまでには、いくらフィリピンでもすでに回復しているだろう、とタカをくくっていた。

ところが、回復が遅れもたついているうちに、雨期と台風シーズンになだれこみ、道路はズタズタ。山くすれにふさがれた道路写真が派手に新聞紙面をにぎわしていた。八方手をつくして苦勞したにもかかわらず、結局イザベラへは行けなかった。

帰宅後届いた手紙には、今もイザベラは孤立状態で、収入は相変わらず乏しいのに、物資が不足し物価高にあえいでいると、窮状がうったえられていた。ともかくにもお金は無事につき、ソーイング・プロジェクトは、担当者の交替など小さなソゴをきたしながらも今すべり出している。

以前イスラエルのナザレでの雷鳴のものすごさに度胆を抜かれたが、フィリピンの雨期もスゴかった。ネリアがコーディネーターをしているオフィスの籐椅子をベッドにして眠った夜は、一晩中ゴロゴロザーザーで、いまにも天井が抜け落ち、ずぶぬれになるんじゃないかと思った。カソリック系の駆け込み寺ウエルカム・ハウスでは、地方から逃げ出してきた若きフィリピン人たちと大部屋で一夜をともにした。友人のコンドミニアムのプールで雨に打たれながら泳いだり、次期大統領選の下馬評や軍の蜂起の噂を聞いたり、いろいろおもしろいことがたくさんあった。

朗読コンサート

山前いたします

戦後四十五年がすぎ、戦争を経験した人たちも高齢となり、戦争という取り返すことのできない罪惡も次第に風化してきました。

〈茅ヶ崎 朗読の会〉では、鈴木政子さんの著書『あの日夕焼け』『満州そして私の無言の旅』を、ピアノ演奏付きの朗読コンサートにして神奈川県内の公民館で公演しています。

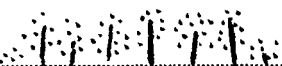
鈴木政子さんは、一九三九年に瀋陽（旧奉天）に渡り、四六年の春日本に引き揚げてきました。そしてこの間に敗戦によるあらゆる辛酸をなめ尽くすとともに四人の弟妹を病氣や栄養失調で亡くしました。この体験をもとに書かれた自分史が、朗読コンサートの『あの日夕焼け』と『満州そして私の無言の旅』です。

〈茅ヶ崎 朗読の会〉では、平和と命の尊さを訴えたいと、自主公演のほか、各女性ネットワークからの公演申込みを受け付けています。

申込み・問い合わせは ☎〇四六七―八六一三―一七三

（宇都さん宅）

あごらメイト



田中須美子さん

住民票差別反対裁判

敗訴はしたけれど

住民票続柄差別表記の撤廃を求めて、東京地裁に提訴していた田中須美子さんに五月二十三日の裁判後のお話をお伺いしました。田中さんの職場、武蔵野市役所の昼休み、思いがけないお話の数々に時間の経つのも忘れ、話し込んでしまいました。

☆新聞に裁判のことが載っていましたね。

ええ、とにかくマスコミの報道の仕方にはとてもショックを受けました。東京新聞を除いた各新聞をその日の夕方十人ぐらいの仲間と喫茶店に入ってばあっと読んだんです。裁判の本質が「夫婦別姓裁判」という形になっていて、夫

婦別姓が法制化されればこの裁判は解決されるんだという書き方になっているんです。これはまずいとみんな落ち込んじゃって……これはどういう意図なんだろうと……喫茶店のすみで私たちの集団だけが暗い顔して必死で新聞を読んでいるわけ、「これは異様な光景だね」って一応写真も撮るとききました（笑）。それから家に帰って東京新聞を読み、まともな内容なのでホッとしました。

☆なぜ東京新聞だけが？

東京新聞は裁判の前に取材があつて、記者は女性でした。二十二日の家庭欄に載った記事もしっかりしてました。ともかく新聞社やテレビ局など司法記者クラブの人たち十五社くらいに事前レクチャーを弁護士が二、三時間かけてやってはいるんです。その時「夫婦別姓」というより「非嫡出子差別」の問題なんですと説明はしたんだけど、書かれた結果はこういうことです。七時のニュース、九時のニュース、十時のニュース（ニュースステーション）を見たらみんな同じなんです。NHKは私たちが出してる住民票続柄裁判交流会通信『Voice』の作業を映しにきたので通信を渡したりしたんですが、『別姓夫婦』というタイトルの五分間やり、私生児という表示を出したんです。

六、七、九時のニュースでは表示は出ないんだけど取材に来た人は「私生児」と言いました。すぐへ婚差会（婚外子差別の会）の人が抗議をしたんですが、電話に出た人が「差別ですかねえワッハッハ」と笑って相手にしなかったらしい。九時のニュースの最後で「原告夫婦は夫婦別姓について問題にされなかったので控訴する」というふうに言っちゃったんです。だからそういう内容じゃない、わかってほしいということで、手紙を出しました。「私生児」は戦前に差別語として民法から撤廃されたんです。

☆夫婦別姓がクローズアップされましたね。

これはもうすごい誤解されちゃう。私たち署名運動にと



りくんでいたんですけど、五千七百の署名が集まったんです。署名に協力してくれた人はシングルマザーの人たちが多いんですが、記事を読んで「ああ別姓が法制化されたらあの人たちは婚姻届けを出して、非嫡出子差別なんか関係ないということになるんじゃないのか、じゃあ自分たちはなんのためにやったのか利用されただけなんじゃないか」と受け取った人もいるわけなんです。これからは支援なんかしないという声も出たりしたんです。運動を着実に積み重ねてきたのに、支援も少しずつ広がってきたのに、そういう運動の分断にもなる。すごい誤解をマスコミは撒き散らしているわけです。婚外子や婚外子の親の人たちからすると「なんだ」ってことになりますよ。じゃあこの差別についてはどうなんだ、差別されていることについてはもう社会的にはしょうがないということなのか、と言われるだろうし差別が拡大されていくという結果になっている。だからその日一日彼と二人で落ち込んでいたんです。

☆このことを説明するのが大変ですね。

そうなんです。職場では全国紙の一面に載ってすごいねとか、テレビにも出て有名人になっちゃったんだね、とか言われるんだけど、私は困ったことになったと思っています。

から、言われるたびに説明するわけです。本当はすごくいい気持ちになっているのに「そうじゃないよ」って照れ隠しに言ってるみたいなね、そういうふうにとられちゃっているっていうのがあって…。

☆田中さんたちの裁判は住民票統制裁判ですよ。判決もひどかったけど、報道も影響が大きいだけにいいかげんに流してほしくないですよ。

私たちの裁判の提訴の背景のひとつとして婚姻届けを何故出さなかったのかということがあります。婚姻届けを出す「夫婦同氏」が強制されること、それから結婚したとたん相手の家と姻族関係を結ぶことになる。結局結婚は戦前の家制度とおなじに姻族関係を結ぶ家と家との結びつきになるんじゃないのか、その婚姻届けを出さなかった「夫婦別姓」のところだけがバーンと出て、その当人たちが、この「夫婦別姓」が法制化されたら婚姻届けを出すんだと解釈したわけです。次の日の朝日新聞の夕刊の『窓』っていう欄にもそういうことが載っていたんです。勝手に決めつけないでほしいと思いました。非嫡出子扱いされたという事で私たちが怒っている、だから裁判を提訴したという書き方をしている。でも私たちが裁判で戦っているの

は非嫡出子扱いされたことじゃなくて、婚外子として差別されることが問題で、親がどんな生き方をしたって、それは、その子どもには関係のないことなんだ、子どもの差別については許さない、国としてはそういう親の生き方でもって子どもを罰するということをしちゃいけない、ということなんだ、という裁判をおこしているわけです。だから非嫡出子扱いされたことへの怒りじゃないんですよ。

☆問題はちっとも伝わっていないわけですね。でも、住民票の記載が差別的になっているっていうのは普通わからないですよ。

武蔵野市役所に勤務して十八年になりますが、最初に配属されたのが市民課だったんです。その時窓口に出生届けを出しにきた人で差別記載についておかしいという人がいました。その時私もわが子が生まれたらこのようにまじめにやっていこう、と思ったんです。夫婦別姓については、昔から考えていました。私の家が家父長制度の最たるもので、父親は自分は天皇だと…もう八十歳になるので今は言わなくてはなりませんが…家事は女がやるものだと言われ続けました。高校を卒業した頃図書館に行って「原始女性は太陽であった」等の本を読み、ああそうかって…。私の個

河野嘉子さん逝く

人史を見直し、それを言語化していくという作業をやりました。差別を対象化していくと、戦前の家制度の中で女性がいかに抑圧されているのがわかってきて、結婚しても氏を捨てずにやっていこうと思ったんです。子どもが生まれると婚外子が周りにいないということもあって、子どもがかわいそうじゃないかといういろいろ言われました。落ち込んだこともあったけど、ある時否定を肯定にすればいいことなんじゃないかと思いついたんです。みんながみんなそれは差別じゃない、かわいそうなことじゃないって言えば楽なんです。そうだ、そういうふうにこんど言われたら言おうと言いはじめたんです。そしたらあまり言われなくなりました。子どもはいま五歳です。武蔵野市に異議申立てをして却下され、都に審査請求して却下され、裁判となった時は二歳の時でした。

裁判をやって良かったなあって思うことは、いろいろな事実婚の人と知り合えたこと。ここまで言ったら離婚かなと思いいながら思い切って彼に言ったりしてたけど、もっとがんばっている人がいることを知ったこと。かえってエネルギーを貰ったと思っています。

(6月5日 ききて・菅原政子)

イラクから帰って真っ先に河野さんに電話をかけた。

開戦前、そして空爆下、河野さんと何度も話し合った。

「もうこうなったら、サウジ国境に女たちで人間のクサリを張るほかないね」と。

河野さんは言った。「私はもうこんな体だし」とも。

イラクとイスラエルで見たこと聞いたことで、私はほとんど口もきけないほどショックを受け、身近な人たちにさえ、「今は話ができない」としか言わなかった。でも、河野さんには話したかった。一言でも二言でも。

何度も電話をかけても、かけるたびに彼女はるすだった。スライドの整理をやっと終えたとき、彼女の突然の死を知った。

昨年、花巻の教研集会で語り明かした一夜、「このとおり真っ白なのよ」と、彼女はかつらを脱いで見せた。

「薬代が高くてね。一回に三千円もするの。本人の保険なのにね」と、見せてくれた薬袋は、明らかに抗がん剤だったが、「がんではない、と医者は言っているのよ」と、どこまでも明るかった。

「人間のクサリ」を持ち出したとき、もちろん彼女は自

分の状態を知っていたのだろう。

*

彼女は「あこら」を足繁く訪れた、というと驚く人が多いと思うが、それはみんなが帰った夜の十時半であり、十一時であり、時には十二時に近かった。

「通りかかったらあかりがついてたから」と、ふいに姿を現して、「からだをこわすよ」と気づかってくれた。多分、超動で疲れた体で家路に急ぐ途中、新宿通りに面した「あこら」の窓を、いつも気にかけて仰ぎ見てくれていたのだろう。

河野さんが病院に行った時、子宮がんはもうほとんど手おくれだった。おなかをはれ上がり、身動きできなくなるまで、彼女はがまんして働き通していたのだ。

全摘後の、ふつうなら一年は休みをとるところを、彼女はまもなく職場に戻った。社会党本部、婦人局から国民局へ。彼女の生活のすべては党活動だった。

追悼式の日、私は六〇年から顔見知りの山本政弘さんに言った。「およそ社会党らしくない——いや、もしかしたら一番社会党らしい人が亡くなりましたね。彼女のあとをだれが埋めるのですか」

私は彼女のことを、内心、「社会党バーバリズム」と呼んでいた。なりふりかまわず、率直で、ひたむきで、彼女

に頼まれると、多分誰もがそうだったように、イヤとは言えなかった。社会党に腹を立てながらも共闘した市民派女性のほとんどは、彼女に負けたのだ。その彼女に代わる人があるだろうか。

「がんのほうがまだマシよね。シンゾーや脳出血のように突然死ぬことはないものね」と、ことしになってからも彼女と話し合ったのに、アツという早さで急逝した。手術が手おくれだったように、自らの変兆に気づきながら、むりをしていたのだろう。

「都知事選に社民連の候補を立てるなんて、恥ずかしくて」と、彼女は泣き出さんばかりだった。いま、安保、自衛隊容認で政権にすり寄ろうとしている社会党を見たら、彼女は何かというだろう。

「恥ずかしくて見ていられないから、私は地下にもぐるわ」と言っているような気がしてならない。（斎藤千代）



集 会 か ら

湾岸で何があったか——

〈PARC〉と〈PAN〉の報告会から

二回目の〈PAN〉（4・21於神田パンセ）は、一回目の〈PARC〉報告会（4・13於渋谷勤労福祉会館）の超満員と比べ、もったいない少人数だったが、報告者が真剣に全身でぶつかった激情の渦、遙か遠くに歴史を見すえて話した、貴重な一瞬に立ち会った幸福を私は今でも余韻として思い出す。一回目は三人の報告者（長倉洋海、神田浩史、斎藤千代）がてんでんバラバラで流れとならなかったのがとても残念だったが、二回目は報告者一人一人が哲学をもった生き方を歴史の創造へと結びつけていた。検証報告が珠玉のような提言となって私たちを現場へと同行した。会場はホールにビデオを備え、階段にはイラクの子どもの爆撃の恐怖や印象が描かれた絵でいっぱいだった。

東京町田の主婦（子どもと考える湾岸戦争の会）は「女性性が毅然としていた。破壊したのは男、建設復興は私たち

女でやる、女のエネルギーの力強さ、迫力を感じた。ホテルで円陣を組みロウソクを付け、水のない中で缶詰を開け……はからずも無駄なエネルギーのない生活、未来の疑似体験をしているような貴重な日々だった」と報告。

日本山妙法寺の寺沢上人は、イラクの人にもらった白い服を着て話した。冷戦終結とともに世界は非暴力で進むと思ったのに、世界中の金を灰にした。世界の金は東欧・アジア・ソ連に向けられるはずだった。狂気じみた大量の空爆、それほどイラクは軍事大国だったのか、イラクの実情をマスメディアは報道していない、と、冒頭に述べ、世界の人々七十名と国境にピーステントを張り、空爆下、脱出行した話、イラクの人の貧しさと、それでも忘れない親切と好意を語った。また非暴力の直接行動としてアンマン・エルサレム間の平和行進を敢行した勇氣！ 連日地元紙に報道されたというが、イスラエルに住むパレスチナ人に勇氣を与えたのではと思う。イスラエルの兵士も、こっそり、私もできることなら一緒に行進したいという。

油田の炎上が空に陸に与える環境調査の報告に続いてペルシャ湾の海の汚染をダイバーが報告した。十七歳の学生は、行かなきゃ本当にわからないことを力説、バーレーンではオイルがずっと降っているような感じで、何か凄いとが地球に起こったんだなと実感したと話した。

二十三歳の大学院生の女性は、偏見のない自分と想っていたが、行つて見て余りにも違ふのにショックを受けたと語り、自分の思い込みを批判する姿勢を持ち続けたい、理解する努力を怠つて攻撃するのは良くない、と強調した。パレスチナ難民キャンプを訪問する時、難民は事件を起こして世界に報道されたいと思つているから中止した方がよいと日本の報道関係の人に言われたが、思いきつて恐る恐る行つてみたら大歓迎され、大感激！日本の報道は一体何だったのか、真実を報せていないと話した。（これは調査団一行全員の共通感想だった）。

斎藤千代氏はシンポジウムで、地球市民という哲学に立って、国際情報のコントロールの問題に触れ、市民レベルでの民主主義が遅々として進んでいないと、アジア二千万日本人三百万人の犠牲で得た憲法第九条の風化を指摘、国連の再生が急務だと訴えた。彼女の哲学がふんだんに溢れていて素敵だった。

最後にゲスト、ザイルの青年三十一歳は、自分たちの手でアフリカ問題を解決したいと、力による抑止の前例を作った恐ろしさ、国連への幻滅、環境破壊の問題を話した。破壊は簡単だが修復には莫大な月日とお金がかかること、本当に貧しいところには援助費が使われていないことを訴えた。またパレスチナの青年は、皆が持つている人権を回

復したいだけだ、と、ますます窮地に陥つた立場を話した。湾岸戦争の総括が市民レベルで始まった。東京も地方もいろいろな集会がもたれ始めている。あらゆるところで討論される中でフェミニズムの視点が重要さを増すのでは、と思う。
(遠藤むら子)

女たちが語る “世界新秩序”

湾岸戦争から未来へ――

湾岸戦争が終わった。しかし、終わったと聞いても、何かわりきれない思いで胸がふさがれたまますっきりしない。この戦争は何であつたのであろうか。

もっと知りたい、もっと語り合いたい、私たちが描く戦争後の未来をアピールしたい、などの思いでこの集会が計画された。

参加者は外国籍の女性を含む約五十名。若い人から中年の人たちまで、年代の幅広さに関心の高さがうかがえた。ペルシャ湾のいのちを守る地球市民ネットワーク(PAN)の一員として、イラク、イスラエルを訪れた斎藤(あごら)、田宮(自由業)、辻(学生)、長島(主婦)さんたち四人の報告で午前の部が始まった。

初めに、イラク国内を写したスライドを見た。子どもた

ちの明るい表情にほっとする一方、荒れはてた子ども病院の様子、電気がない、水がない、クスリがない、注射針がない。子どもをかかえてきても何もしてあげることができない状況に胸を痛める。

またイラクの子どもたちに、一番心に残ることを描いてもらったところ、全員今度の戦争の絵を描いたとのこと。かけがえのない子どもたちの心に刻みこまれた戦争は、どのような傷を残したであろうか。

今回の戦争の特徴の一つは、アメリカ同盟軍の完全なまでの情報操作が行われたことがあった。有名になった、油にまみれた水鳥の映像、あれは今回の戦争によるものではなかった（以前のアラスカの映像）のが、その一例。

あの一枚の写真で、アメリカ国内はそれまで半々だったブッシュ支持が、一挙に98%まで上がったという。

午後からは参加者が思い思いに自分の気持ちを出し合い、ぶつけ合った。

日本政府への不満、憤慨。もう一度、安保について考えたい。憲法九条が実質的に風化しようとしている不安など、もっと知りたい、学びたいとの声が多数であった。

これから一人一人の思いをどう未来へつなげていくのか。行動しないと意味がない。

自分のライフスタイルの作り方と絡めて、世界のピープ

ルとピープルのネットワーク作りが重要と、今後ともこうした会を続けることになった。

十時から五時までという長い時間であったが、あっという間にすぎた時であった。（川崎みどり）

（5・19於新宿区立西戸山婦人会館／主催へあこら自立の心理学グループ）

『太陽の男たち』を観て

アラブを考える集い

五月の「湾岸戦争から未来へ」の集会の席上、「アラブを知るのはこの映画が最高」という話が出た。集会後すぐ上映会を開くことに決まり、さっそく、会場とフィルムを手配、六月六日に上映会。準備時間がなかったので心配したが、狭い会場は満員の盛況になった。

重い映画だった。終わってミニ討論会をする予定だったが、司会役のしま・ようこさんは「声が出ません。いま沈黙していたい」。結局、斎藤さんから、映画や作者についての説明、イラクの印象などの質疑応答があり、終わって有志が二階のイタリー・レストランでタベリ会。

赤字を覚悟していましたが、何とかトントンでした。この映画、日本にたった一本のフィルムがすでにスタスタ。

見かねた（へあごら）有志が出資して、新しいプリントをつくっているところです。各地で上映会を開いて、パレスチナ問題を考えつつ、出資金が回収できるようにしたいと計画。

各地でもぜひ上映会を！（か）（6・7 於シネブラザ）

〔当日の感想から〕

カナファア二は九年ほど前に知って、作品を読みました。「太陽の男たち」というのが映画化されて、何回か上映会を知ったのですが、いきそこね、六月六日にやっと見るということができました。思いこがれていた女の人にやっと会えたという感じでした。イラクがクウェートに侵攻したらこてんばにやつけたのに、イスラエルには相変わらず何でもやらせるアメリカとその同盟国には全く頭にきますね！日本も含め、フセインを極悪人にしたてる世論にも腹がたちます。もっとわるい奴がいるのにです。

パレスチナのことを書かずにはいられなかったカナファア二。本文の文字がここにありませんね。（滝口忠雄）

社会党改革のための女性懇談会

女の集会というと、定刻より遅れがちのものだけど、この日は定刻前に続々つめかけた。みんな何となく、鼻で風

切る。勢い。社会党に言いたいことが山ほどあるんだろう。「皆さんから一言……」司会の岡崎トミ子さんから声がかかったとたん、ワーッとあちこちで手があがる。デパートの特売場に群がるオバンの勢いで、みんな話すこと、話すこと……。

「非武装中立を捨てて政権にすり寄るとは何事！」

「女性をロボットか下部構造としてしか使ってこなかった党の体質そのものを変えよ」

「たして二で割るような妥協をするくらいなら、土井さんは党を出て女性党をつくれ」

拍手、爆笑、同意の声。隣にいた人が言った。「ドラマよりよっぽどおもしろいネ」

「今日の提案、またブラックホールに吸いこまれないよう、発言集をつくって、全議員と全出席者に送ってください。」

それが党の政策にどう取り入れられたかというコメントも添えて」という斎藤千代さんの提案を岡崎さんが受け入れて発言集が送られてくることになった。ちゃんと採用されない、もうホントに社会党を見限りますわヨ。（ふ）

（6・7 於主婦会館）

働きつつ育てつつ

保育所をつくった母たちの軌跡

働く母の会編

ドメス出版

(四六判 定価2472円)

〈働く母の会〉という古風な名称の会を知ったのは、妊娠十か月目だった。転職して半年で妊娠。キャリアを積んでから出産する計画も頓挫し、悩んでいた矢先だった。入会してみると名称のイメージとは別の、非常にフレキシブルなメンバーが活躍しているのだった。

本書では、この会を推進してきた第一世代の女性たちを中心として、保育所づくりの軌跡を記している。

結婚した女性が働くことさえ非常識だった時代に、自分の意志で子どもを持ち、配偶者を筆頭に周囲の人を説得

し進んでいくあたりは、クールを装うわれわれの世代にとっても充分に感動的だ。

さらに刺激的なのは、本書に登場する女性たちは自分の満足を求めるだけでなく、困っている人を知るや否や、即座に手を差し伸べるという点だ。現実にあふれていて、本当の大人のいい女たちといった感じだ。『女性の時代』といわれるよりずっと以前から、「男」よりも男らしく「女」よりも女らしく生きてきた姿は自然で美しく、是非とも自分もこんな顔になりたいと思うのである。

本書は、保育所づくり運動の歴史と実情を知る第一級の記録であると共に、女性が真の職業人となるためには、仕事だけしてきた男性のやはり三倍以上

働かなくてはならなかった時代の実相をリアルに伝えている。その中で、一つの大きな課題が提示されてくる。女性の仕事が公務員、半官半民的分野から民間企業へと拡大するにつれ、一般的な保育のシステムでは対応できなくなっているという事実だ。

これは、結婚観・仕事への姿勢・人生への態度と深く結びついている。つまり厚生省やマスコミが騒ぎたてる子どもの減少というデータなど、実は本質的な問題ではない。前述したように個人的な事柄だけに、普遍的な解決のシステムが構築しにくいところに問題があるのだ。また『子ども』は個人的な事項ではあるが、社会の未来をクリエイトしていく存在である点もポイントになる。

課題は多いが、本書はそのパスワードを教えてくれると確信している。

山本 光子

(西武百貨店営業企画室)

木犀の匂う朝に

半田たつ子著

ウイ書房刊

いつも几帳面でまじめな半田さんの内側には風にとよぐ花びらのような繊細な心がある。書名と同じ題名のエッセイで始まるこの四十五篇の随想集は、彼女のその一番やわらかな心が盛られていて、思わず惹き込まれて読んだ。

そのやさしい文章の奥に見え隠れする一人の男性——この本を手にしたときの直感どおり、これは亡きおつれあひへの挽歌だった。

どの一篇一篇にも、書き終えた彼女の作品をほえんで読んだに違いないやさしいひとの面影が偲ばれる。それを、あらわにではなく、木犀の香りのようにほのかにただよわせたところが、いかにも半田さんらしい。『ウイ』はことし十年目。たつ子さんを支え続けたその方にお会いしたかった。(千)

四六判 二六九ページ 一、八〇〇円

女の数字

15%対30%

総理府婦人問題企画推進本部が発表した「西暦2000年に向けての国内行動計画（第1次改定）」によると、「国の審議会等での女性委員の割合を、5年間に15%にすること」が新たな目標にされた。

一方、'89年に「足立区女性会議」を設けて積極的な提言を行ってきた足立区は、今後5年間で審議会委員の30%に女性登用を義務づける計画を発表した。

具体的には①現在女性委員ゼロの審議会は、次期改選時に女性委員を1人以上選出する。②女性委員1人の場合は、次期に2人以上を増員を義務づけ、5年後に女性委員を30%にし、最終的に全委員の半数を女性にするという画期的なもの。

総理府によると、'90年6月現在で都道府県レベルの全審議会委員に対する女性委員の割合は平均8・8%、国の審議会委員は'90年11月現在で8・2%。足立区はこれに対し、全委員1,138人中、女性188人(16・5%)、41審議会のうち15審議会が女性ゼロ。これを改善するために委員の選出基準を「各団体の代表者」としていたのを、「女性の適任者の推薦」とし、推薦を要請するなど、キメ細かい配慮がみられる。

5月29日、「新行動計画」の記者会見の席上、「“目標”が15%とは謙虚すぎるのでは」という質問に婦人問題担当室長は、「選考基準に該当する女性が少ないので」と答弁していたが、足立区は、選考基準そのものも改定するという前向きの姿勢。各市町村、都道府県に“足立効果”が波及することが期待される。

(R)

在宅介護に射す光

あごら試写室

「病院はきらいだ」を観て

遠藤むら子

私が大宮の特養ホームの車椅子散歩
介助のボランティアをして四年余。入
所者に自由のない、町から隔離された
生活。しかしそこは湾岸戦争も関係な
い一つの無風地帯で、ある意味では至
れり尽くせりの老人たち（それは世話
になるのだから何でも言うとおりに従
うということにも通じる）。「こんな
所に入ったらお終いだヨ！」と言って
私を狼狽させた誰よりもしっかりした
おばあちゃん。アツという間に亡くな
り施設のありように疑問をますます感
じさせ、北欧型の個人主義を重んじた
独立型の方法に答えを見出したのも東

の間、本場デンマークから視察に来た
一行が洩らす溜め息は、「在宅の方向
へと政策転換をしたいがとてむずか
しい」というもの。團長さんはそれな
ら日本のほうが遙に可能性があると思
ったという。良い意味でまだ日本には
家で最期まで一緒にくらしたいという
習慣は根強い。日本の在宅介護は、安
上りな従来の、嫁さんに面倒をみて
もらう方式が結局いい、ということな
のだろう。と、そう勘ぐるのも私だけ
ではないと思う。しかしこの映画の在
宅ネットワークは私に明るい展望を与
えてくれた。

家、家族、庭、四季、社会のざわめ
き、匂い……個人の生きる保証は過去
を切り離しては存在しない。その過去

をパッと切って、病院・施設など、何
の心配事もない世界へと連れ出すこと
が間違いないのかもしれない。家族と共
にいたい、家族の一員としての自覚、
この家で最期まで暮らしたいという諸
々の人生の喜怒哀楽の染みついたこの
場所、今を生きているいろいろな繋が
り。この映画を観て、何よりも個人の
生きる尊厳、主体性を保てる方法を追
求する佐久市福祉課と佐久病院の献身
的な在宅介護出前メニューが、老人対
策として最も世界の最先端をもよくも
のなのかもしれないと思った。

最後に近所の人たちが医者をついで
寄り合いをもち、これから地域の中で
の在宅介護の方法と位置づけがどんな
形でネットワークの中に組み入れられ
てゆくかという場面。これこそ私の最
大関心事。続編が楽しみなドキュメン
タリーであった。

ピース・ピルグリム

—— 市民が訪ねた戦後の湾岸（続き） ——

斎藤 千代

風と雲

野鳥のさえずりで目が覚めた。

開け放した窓からは、かくわしい朝の風。窓辺に立つと、目路いっぱい緑の芝生がひろがる。毎夜毎夜のテレビショウで想像していたあのバグダッドとは思えない静けさと美しさが切ない。

ふと軒下を見ると、パラボラアンテナが朝陽に光っている。CNNのだろうか。この高級ホテルに人質を泊めて「ゲスト」と称したフセイン氏、それをホステージ（人質）とからませて「ゲステージ」と伝えた西側報道が思い出される。戦争回避に精いっぱいのアラブの知恵だったろうに、「人間の盾、悪魔のフセイン」の迷声を高める結果となったことが、

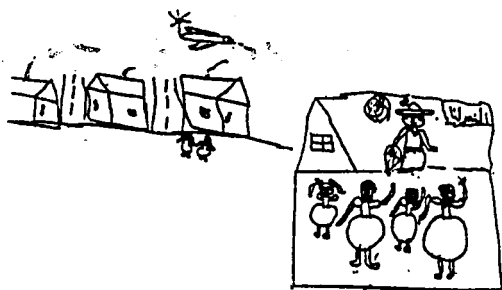
にがく心に浮かぶ。そして、穏やかな春景色とは裏腹の、昨夜のイラク赤新月社総裁、イブラヒム・ヌリ氏の話が、黒雲のように頭にひろがった。

夕食前、急な呼出しを受けて赤新月に赴いた、A.P.A.N.V.のメンバー、寺沢上人・下田さん・私の三人に、総裁は沈痛な面持ちで話した。

「食糧不足は深刻な栄養失調をもたらしている。母親の七〇%が母乳が出ない。子どもたちに広がる下痢・嘔吐。根因は栄養失調による抵抗力の喪失。たとえ下痢止めや抗生物質があったとしても止めようもない。ミルクと食糧を補給しなければ乳幼児の死亡は増え続け、十万人以上に達するだろう。」

医療用ミルクは八月の開戦前に前渡金でスイスに発注済みなのに、経済制裁で抑えられている。毎年七億ドル輸入している医療品も去年は一万一千ドルしか入らなかった。病院にたどり着いた患者に投薬ひとつできないほど、つらいことはない。人道的措置として緊急援助がほしい。そして何よりも経済封鎖の解除を。イラクはこの二十年間、自立した国だった。今後も、恒久的な被援助国にはなりたくない。経済封鎖解除に必要な物資を入手できるように、海外資産の凍結が解ければ、全力をあげて自力で復興に努力する」

イラン・イラク戦争後、経済が急激に悪化して、前渡金でなければ欧米諸国と取引できなくなっていた事情は、昨日柴田さんに聞いて驚いた次第だった。O.P.E.C.成立の翌年、イギリスの「満洲国」にも似たクウェートを領内につくられてペルシャ湾への出口をふさがれたイラクの苦境、そのクウェートの石油増産による石油価格の低迷、ブラックマーケ



ットによるイラク・ディナールの暴落。経済的に全く行きづまっていたイラクの事情は、昨秋来の学習で承知していたが、前渡金を渡しずみの取引まで凍結されているとは。空爆前からイラクは「呼吸困難」だったろう。ガルブレイスが言うように、「南アに対する経済制裁と同程度で十分」だったのでは……。

思いにふける私を、さらに一撃することばが飛び込んできた。

「イラクは 国連から七百ビリオンドルの賠償金を課されようとしている。これを受けなければ経済制裁を解かないと言われたが、イラクはそれでは立ちゆかなくなる。それがどんなに非人道的なことか、貴国の人々に伝えてほしい」

あんまり巨きなお金で見当がつかない。seven hundreds billion はいくらになるのか、と寺沢上人に聞かれて、九十億ドルが九ビリオンドルだから、七千億ドルだろうかと、てのひらに数字を書いてやっと答えたが、円の換算は宙ではできなかった。イラクの国家予算は九十億ドル強、八十年分もの予算にあたる賠償を、安保理は本当に課すのだろうか。

イラクにどうしても行くのなら、Gパンにセーターではなく、フォーマルなスーツを用意してほしい、と出国前イラク人の知人に忠告されて、昨夜はそれを着て行った私だったが、「日本の代表」と紹介された私たち三人を、総裁はどのように受けとめたのだろうか。会場が狭いので三人限り、との指定を受け、男女それぞれの最年長者が一人ずつ、上人とともに出向いたのだった。

Saddam・フセインがどれほど愚行・凶行を演じたとしても、そのツケを負うのは、結

局イラクの国民であることを思うと、賠償の宣告は、せめて復興の目途がついてからにしてほしかったと、東洋の庶民は心痛む。

が、それだけの心づかいがほんの少しでもあれば、そもそも戦火は開かれなかっただろう。

岡田さん


ヨルダンで用意したホブズ（円形の平たいパン）にチーズ、ウリのサラダ、日本からのサケ缶などで朝食を終えてロビーに降りると、イラク政府の役人が待っていた。

「この方が情報省のアブドゥール・ジャマルさんです。これから私たちに付き添って、案内して下さいます。同時に、ここを発つまでのお目つけ役でもあります」

寺沢上人が紹介したアブドゥール・ジャマル氏は、西欧的な顔立ちの、いかにも能吏タイプ。年は三十半ばすぎだろうか。

岡田英次に似ているから、岡田さん、と呼ぼう、と私は提案した。一度では覚えにくい名ということもあったが、会話の中に彼の名が登場することもあるだろう、その度に彼が神経をとがらせても気の毒だ、と。

英次に似ている、には一斉にブーイングがあがったが、岡田さんと呼ぶことはすんなり受け入れられた。



イラクに入っても情報官がつききりで“定食コース”以外の見学は難しいと聞かされていたが、私たちかなりの希望を申し入れようと私たちは入国前から話し合っていた。

技術コンサルタントの下田氏は、上下水道・発電所などの故障の実態調査を切望していた。必要な部品を調達して、場合によっては長期滞在も……との意気込み。ミュージシャンを志しながら空調や配管の実務に携っている田村君も、同様に腕をふるう機会を待っていた。

湯浅君と行木兄弟は、電気・水道など諸施設の破壊の実態と市民生活の現状を、細かい数字まで実証的に把握したいというのが願ひ。

長島・田宮・辻・私の四人の女性はい、それに加えて、女性と子どもの実情を知りたい。できれば個人の家庭訪問を。そして辻さんは特に小学校を希望した。

できるだけ自分の足で歩き、目で観て、自分の皮膚感覚で知りたい、というのが全員の希望だったが、社会主義国の常として、それほど自由な行動が許されるだろうか。私は十六年前、キューバを訪れた折、小学校や保育園の見学をとりつけるまで、何度も交渉を重ねたことを思い出した。が、岡田さんの回答は意外だった。全部OKだという。小学校もちょうど三日前に再開した、今日、案内しよう、と。

十時四十分、バスは動き出した。テレビ朝日とTBS、二組のテレビ・クルーも同行した。ジャーナリストが排除されてからも、この現地人スタッフたちは取材を許されていた。

歓 声

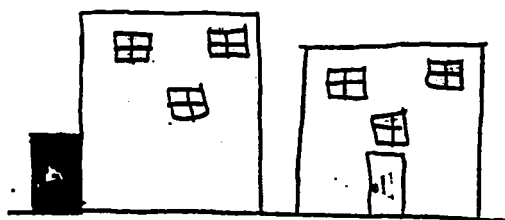
ホテルを離れてまもなく、チグリス川にかかる橋が見える。橋梁と中央部だけを残して、両端がスッパリと断たれている。橋梁をすべて残したのは、米軍がバグダッドに進駐したとき、すぐ修理して使えるようにするため、とささやかれているという記事が日本の新聞に出ていたことを思い出す。

イラクの人は、この攻撃法は、できるだけ残酷な印象を与えないように工夫したのだ、と言う。ベトナム戦争では橋が斜めに川に突き刺さり、市民生活を破壊したという強い印象を与えた。そこから学んだ「教訓」の成果だ、と。

その橋からほど近い小学校の門をくぐったとたん、悲鳴にも似た歓声があがった。「日本の人民からイラクの人民へ救援医薬品」の横断幕が目に入ったのだろう。

手を振る、足を踏み鳴らす。テレビカメラの前に殺到して、我先きに写されようとする子どもたち。イラク、イラク、イラク……、大合唱が、やがて天にもひびけと校庭いっぱい広がる。二か月間休校、ほとんどが地方に疎開していたという子どもたちの再会の喜び。大好きな学校が始まったうれしさ。

どの子も血色が良い。身なりもさっぱりしている。大きな目、高い鼻、整った顔立ちの



子どもたちは西洋人形が動き出したよう。少しはにかんで先生のスカートのかげに隠れる小さな子も。

十年前、この子たちにそっくりの子どもたちを見たことを思い出した。一九八〇年、第二回世界女性会議。コペンハーゲン大学を会場としたその会議は、第一回メキシコ会議と比べると、うそのように静かで小ぢんまりしていた。その会場前の広場に毎日歌声が響き、小さな子どもたちが踊っていた。それがイラクの子どもたちだった。静かで控えめな会場に、たった二つ、異彩を放っていた壁面展示。一つはイラン、一つはイラク。ホメイニ師とフセイン大統領。それぞれ大きな肖像を掲げて、お国名物のナツメ菓子をつんだんに振舞うのを評価した人もいたが、私たち民間の活動家はささやきあったものだ。なんだかわいねえ。——日の丸の小旗を打ち振った日々を、私は思い出して、心が冷えた。

その二か月後、イラン・イラク開戦。新聞の片隅に、「イラクの少年兵が戦車で神風突撃」の記事を見て、私はとっさに、歌い踊っていた子どもたちを思った。そして今、歌い跳ねる子どもたちの、変わらぬ愛らしさ、ひたむきさ。

イラク、イラクの大会唱は、いつのまにか、サッダーム、サッダームに変わっていた。

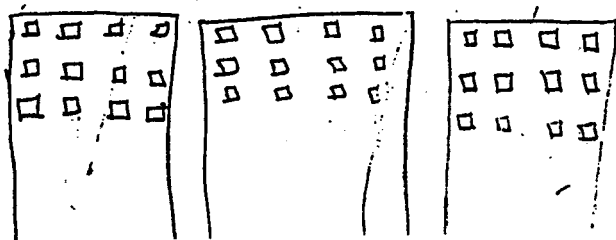
辻さんは、持参した画用紙を、一枚一枚子どもたちに渡した。いま心に思っていることを描いてネ。何本もの手がそれぞれの画用紙に殺到した。どんな絵が描かれることだろう。学校が始まって嬉しいよォ！ はじけるような声が絵になるだろうか。

病院と捕虜

続いての見学は、セント・ラファエル病院。病院も最も見たい所の一つだったが、きのう修理を終わったばかりとか、人影はほとんど見えない。廊下の水道の蛇口をひねってみたが、水は全く出ない。結局、中は見せてもらえず、医薬品と食糧の絶対的不足、電気も水も薬もない中で病院の機能を果たせない窮状を院長から聞かされて、援助を要請される。病院の向かい側は国際赤十字。門前に長い行列が見える。アラビア語がわかる人の話では、捕虜が英国人に指揮されているところだという。岡田さんに質問すると、「国境からの難民たちが、家族の名がないかと捕虜の名前を確認しているところだ、写真を撮るな」と言う。行列の全員が男性、壇上に立った英国人が、棒かムチのようなものを振り回して、群衆をどなりつけているのも気になる。国際赤十字の玄関前であること、英国人の、征服者そのもののような傲慢な態度から想像すると、どうやら捕虜説が真実のように思える。停戦の時テレビを賑わせた捕虜たちは、前線から無事送り帰されたのだろうかと思ってしまう。仕方がなかっただけに、直接質問できないまま立ち去らねばならないのが残念だった。

町に戻った平和

減入った気分は、「あ、映画館が開いています」、寺沢上人のはずんだ声に、すこし励ま



れる。「戦争中は全く開かれていなかったんです」と、上人は目を輝かせる。岡田さんも上機嫌。民心を高揚させるために当局も必死なのだろう。

「キャバレーは開いてますか」——車中の質問にどっと笑い声。「それはまだです」と岡田さんは受け流したが、この社会主義国にキャバレーはあったのだろうか。あったとすればホステスは……などと想像したもの、どうも姿が浮かばない。

バスの窓から見回すと、アンマンではほとんど見かけなかった書店や文房具店が見える。ただ、女性たちはほとんど黒いアバーヤ(ペール)。アンマンの女性たちは軽やかな白だった。喪服なのだろうか。

自転車走らせる女の子がいた。イラクでもヨルダンでも、自転車をほとんど見かけない中で、女の子の赤い自転車は格別ピカピカに見える。裕福な商人の子だろうか、服装も整った、色白で目の大きな女の子は、バスの中から振る手にこたえて、手を振りながらバスを追いかけた。

食 堂

町の食堂で昼食。サラダとシシカバブは、ヨルダンの食堂とほとんど変わらない。量も結構多い。少し食べ余したお皿をどう処理するか、と注目したが、ウェイターは無造作にお皿を重ねていく。敗戦の翌々年、学生とは名のみ、米軍のウェイトレスとして働いてい

たところ、パンの一切れでも残してくれないかと、息をつめて見まもっていたことを思い出した。飢えは当時の日本ほど深刻ではないのだろうか、それとも恥の文化に生きるアラブの誇りなのだろうか。

代金は十五ディナール。イラク人の給料では日本人の一万五千円ぐらいの感じだろうか。紙バックのジュースも店に並ぶ。買い手がいないのか、ほこりをかぶっている。製造月日は一九九〇年八月二日。忘れもしない、あの日だった。

大臣を待つ

続いてバスは三階建ての建物の前で止まる。Organization of Friendship for Peace and Solidarity と英字も併記された表札から想像した雰囲気と違って、中はなにやら冷やーっと冷たい。恰幅のいい女性が一人一人に握手するが、そのお座なりなこと。女性はゼネラルセクレタリー、ここの代表者、マリブ・アヘムド・カメル女史、と紹介される。壁には、子どもたちの頭を撫でるフセイン、子どもを抱くフセイン、フセイン、フセインの写真がズラリ。「うさんくさいね」「ほかを見せたくないで時間つぶしに立ち寄ったんだろう」……ヒソヒソ声が起こる。

「ここはイラクの代表的な平和団体で、毎年、広島・長崎にも代表団を出しているそうです」。上人が、弁明するように声を張りあげる。「厚生大臣が見えるそうです。しばらく



待ちましよう」

「しばらく」は、五分になり、十分になる。私はそろっと部屋を抜け出して、水や電気
の状況を点検。トイレには紙があり、水も出たが、廊下の冷蔵庫は常温。保存食らしい小
さな箱が少々、申しわけなさそうにすみっこに身をすくめていた。

午後二時、大臣はどうも現れなかった。

陳さん

情報省が招待したのか、バスには、TBS、テレビ朝日の現地スタッフのほか、きのう
声を交わしあった新華社の二人の記者も同乗していた。その若いほうの陳記者は、隣の席
に座ると、北京大学で共同通信のK氏と同学だったと、人なつっこそうに語り、天安門も
日本人の記者とともに取材した、と親しげに話しかけてきた。

私の手の中のノートを取り上げるなり、

1987

我沿長城歩行

1988

在雪山写大熊猫

流れるような字で書く。

中国では知られたカメラマンだと自己紹介して、バグダッドに来た経過を風のような速
さで書き始めた。

1990. 12. 20 土耳其

12. 21 - 22 安曼

12. 23 - 1. 14 巴格達と書きかけて Baghdad と英字にしたのは、読めない
と思ったのだろうか。

1991. 1. 14 - 1. 29 安曼

1. 29 - 2. 1 尼科西亜 Cyprus

2. 1 - 14 Tel Aviv

2. 14 - 23 Jerusalem

2. 23 - 3. 1 Cairo

3. 1 - 15 安曼

3. 15 ~ Baghdad

と、目まぐるしい行程を記しながら、ソ連から十万人ものユダヤ人がイスラエルに移住してパレスチナ人を圧迫しているのが問題だ、と、一瞬、声をとめて、私の顔を見つめた。
私のよりも少し小ぶりの彼の取材手帳は、ハエの頭のような小さな字が、びっしり書き込まれている。見ると、バグダッドの物価の推移らしい。

小麦粉 2.75 ID/50 kg → 7 ID/1 kg 129.76

八月二日以前は五十キロ二・七五イラクディナールだった小麦粉が、今は一キロ七ディナール、つまり一二九・七六倍だと説明する。

1 D = 3.228 \$

1 \$ = 6.68 D Black.



とあるのは、闇市でのドル相場。公定で、一ディナール三・二二八ドルのはずが、六・六八ディナールでようやく一ドルだという。

中国大使館の近くの IBM SALIM ストリートでは庶民の家が、厚生省のそばでは市場が破壊された。闇市ではフランス製の香水が七ディナールから八ディナールで手に入るが、石油はリッター当たり〇・〇九ディナールだったのが七・十ディナール、約八十九倍に高騰して、しかも二十日間に三十リッター配給されるだけになったと、情報を次々に提供してくれる。ハエの頭ほどの文字でも、そこは同文同種の国、貴重な情報で埋まる手帳を借りて斜め読みを始めたときバスが止まり、前のほうの席にいた上司が近づいて来た。陳さんはあわてて手帳を隠すようにしまい、じゃ、また明日会いましょうと、そそくさとバスを降りた。この後、新華社の二人には、ついに会うことはなかった。

爪あと

バスが止まった所は、陳さんの言った市場だった。百メートル四方ほどの広さが見事に吹っ飛んで、瓦礫の山になっている。「米軍は、市民は攻撃しなかったと言っているが、このとおり」と、岡田さん。

その隣にあったというデパートも、同様の広さの瓦礫の山。官公庁や大きな施設は絶妙のピンホール爆撃で外壁を見事に残し、一見破壊されたように見えないのとは対照的であ

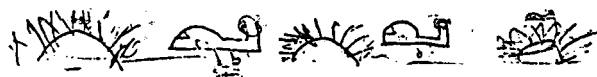
る。明らかに爆弾を使い分けたのだろう。「市場もデパートも、庶民が買物に行く一番混む時間をねらいすましての爆撃だった。見せしめの爆撃です」と岡田さんは顔をしかめる。

その瓦礫の前に、オレンジを山と積んだ小さな屋台が出ている。「爆撃の跡を見ようと見物人が押しかけている。それを目当てにした売店も出た。たくましいアラブ商人」という記事を空爆初期に読んだことを思い出したが、町の住人たちはもう見あきたのか、見物人は見えなかった。

デパートのすぐ隣の厚生省は、全壊したデパートとは対照的に、十階近いビルがどっしりした姿を見せている。そばのブロンズの母子像を見下ろして、大きくほえむフセイン像も健在だ。が、近づくとき窓がすべて黒ずんでいる。外壁にはかすり傷ひとつ与えず、中は完膚なきまでに破壊しつくしたお得意のピンホール爆撃。計算しぬいた弾道と破壊力。どんなにか、その新型爆弾を試してみたかったことだろう。そこに使われた日本のハイテク……。九十億ドルを出さざるを得なかった日本の経済の仕組みが、グサリと胸に刺さった。

結 婚 式

重い心で帰り着いたホテルに、門のほうからにぎやかな音楽隊が入ってきた。トランペットにカスターネット。明るいテンポの音楽にからだをはずませて踊りながらホテルに近づく一団の中央には、白いベールがまばゆい花嫁が見える。



一緒に踊って、踊って……。手まねきに私たちも群れにとけこむ。ギリシヤ映画『旅芸人の記録』のようなひとこま。女も男も子どもたちもさっぱりと着飾って、みんなこぼれるような笑顔。婚約者が帰って来た、無事に帰った、と、伯母かと思われる年配の女性が、嬉しそうに嬉しそうに語りかける。さあ、踊って、踊って……。踊ることが祝福になるのだろう。それにしても無事に帰れてよかったねえ！手を揚げ足を揚げ、回転し、抱き合い、私たちも、ただ踊りに踊った。

音を聞きつけてテレビカメラが駆け寄る。きょうはこれで二組目、どちらも帰還兵、今夜放映する、と、カメラマンも息をはずませていた。

闇の中で

夕方、岡田さんから、思いもかけぬ申し出があった。明日、カルバラとナジャフに案内するという。反乱軍の牙城、今も激戦中と西側が報じているこの二つのシーア派聖地は、十日前に平定、と岡田さんは言う。南のバスラも平定した。希望ならバスラへも……。ともバスラに行くなら、行きも帰りも車中泊、とは聞いたが、車中泊であろうと何であろうと、行けるものならバスラにも、と、私は心がはやる。バグダッド市内を見学しても、なぜか今いち胸に響いて来ない戦争。カルバラなら、ナジャフなら、ましてバスラまで行けば、何かが見えるのではあるまいか。激戦中という西側情報と、平定したというイラク情

報の落差も確認したい。

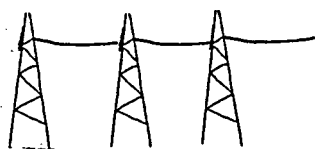
田宮さん、辻さん、湯浅君はバグダッドにとどまって市内の様子をもう少し細かく調べると言う。水道にしても電気にしても、闇市の物価や人の動きにしても、概論ではない各論を把握したいという彼らの意見はもつともで、私もからだを二つに分けられるものなら分けたい心地。それでもバスラへ、と心がなびくのは、るいてる戦車、装甲車、トラックの骸骨の傍らに横たわっていた、あのイラクの兵士たちの映像が脳裏から消えないためだろう。前線の少しでも近くへ。実像に一ミリでも近づきたい。

その夜、闇に包まれたある部屋で、前線から帰った兵士の話があった。

地下七メートルの陣地にひそむ兵士たちの頭上に、爆撃は二十四時間休みなく加えられたという。一睡もできない苦しさ、兵士たちはほとんど半狂乱になり、一人また一人と壕を出て、ゴキブリのように叩きつぶされた。サウジに近い砂漠から、万死に一生を得て帰り着いたその兵士は、前線で生き残ったものはほとんどいないだろう、事実を語ったことが知れば生命はない、と、闇の中で語り、闇に消えた。

頭を見事に切り取られて

「バスラまで案内したいと思ったが、時間的に無理なので、きょうはカルバラ、ナジャ



フ、バビロンを案内します。潰滅状態のバスラに比べると、カルバラ・ナジャフの破壊は半分程度だが、それを見ればバスラを類推できるでしょう」

朝になって岡田さんはこう言い渡した。バスラには△国境なき医師団▽や△ガルフピースチーム▽のメンバーが行く、という。

フランスを拠点として全世界の難民救済ボランティア活動が続けている△国境なき医師団▽は、バグダッドにも早々と乗り込んで活躍していた。そのメンバーの一人、背の高い、いかめしい感じのドイツ人医師、シュタイン氏は、私たちのバスに同乗した。

九時に出発したバスは、全壊したバアス党本部など、破壊の跡を見ながら、ユーフラテス川を右に、カルバラへの国道を進む。

バグダッドとは趣きの異なる農村地帯が広がる。にこった川で洗たくしたり水浴びしたりはスカンドリア地区。その河水が飲み水にもなっているという。水がめを頭にのせた女たち。ほとんどボロのような服をまとい、草を食べている子どももいたのは、マホイビア地区。戦前からの風景なのか、戦後の非常事態なのか、初めて訪れる私にはわからない。が、空爆のあとは、崩れた町工場に歴然としている。

国道沿線の至るところで給水サービステーションが破壊されている。バグダッドにもまして地方の伝染病が心配だと、赤新月の総裁が話していたことを思い出す。

無線塔も電柱も、先端だけが、カッターナイフで切り落とされたように、一つ残らず正確に撃ち落とされている。情報の伝達が近代戦の死命を制することを知り抜いていた高度

情報化国アメリカならではのアタック。リモートコントロールで、標的ゲームのように撃ったのだろうか、それとも目測による爆破なのか。どちらにしても尋常のわざではない。

イラク全土の制空権は、空爆開始一、二日で完全に連合軍の手に落ちたという。塔の周囲を飛び回って、狙いすまして撃つことも可能だったろう。映画『ディア・ハンター』のシーン、そして私自身体験した機銃掃射の恐怖などを思い出す。

イラク兵たち

四車線の中央を区切るフェンスがところどころ押し潰されている。戦車の轍だろうか。道の脇の草むらに兵士がたむろしている。砂漠の下から掘り出したのか、泥まみれの戦車の上は、生活用品らしいものがごたごたと積み上げられ、戦車というよりはどう見ても大八車の印象だ。カーキ色のテントを低く張っているのは、引揚げの途中の一時泊なのか。周りの木が少し伐られているのは炊飯に使われたのだろうか。自炊しながらの行軍。ふと一九四五年、蒋介石軍が台湾に進駐した時、「日本の軍隊を見慣れた目には、軍隊とはとても思えなかった」と話してくれた台湾の友人の話を思い出した。中東随一、世界第四の陸軍大国イラク、と、テレビは毎夜のように告げたが、私にはどう見ても、イラク兵は「一見、労働者風」の印象。

兵士を乗せた有蓋トラックも続々と引揚げてくる。屋根の上に横たわる兵士は動かない。



検問の間隔は次第に短くなり、ほとんど十分、十五分おきになる。

五十分ほど走ったところ、岡田さんが「左を見よ」と言う。左手のナツメヤシの林が、三千坪ほどの広さで伐り倒されている。「ゲリラの逃亡防止のために伐った」と、岡田さんは、やや得意げである。

下草は火炎放射器でも焼いたのか、黒く焦げている。反乱は十日間続き、十日前に鎮圧された、と岡田さんは説明した。考えていたよりも反乱の規模は大きそうだ。

壁の文字

カルバラは、モハメッドの甥にあたるシーア派開祖を祀るモスクの町。同じシーア派の聖地ナジャフと並んで、シーア派の巡礼の地。平和なら異国の人をいざなう観光都市。

その盛り場の中央にバスは止まった。四つ角の商店は、戦車砲でも撃ちこまれたのか、不規則に破壊されている。

大破した商店の隣の二階の小窓では換気扇がくるくると回っている。人か……。風だった。街路に飛散する瓦礫の上にも、灰色の風が吹く。

壁の、窓の、銃痕。それにもまして、私は、壁に柱に、無数に書き散らされたアラビア文字が不気味だった。スローガンか、檄か、黒々と書かれた文字が、黒々と消されている。そしてまた、赤く、黒く、新しい文字が書かれている。それを書いた人、消した人、また

書いた人が確実にここにいた。どんな思いで、どんな人が書いたのだろうか。

解読してもらったことのできたいくつかは、「裏切り者は死ぬ」であり、「サッダム・フセインと共に永久に生きん」であり、朱で消されたゆえに読めた文字は、「バルキッサドルの道」であった。バルキッサドル——一九八〇年、ホメイニ革命を支持して「バアス党はイスラムに反している」とファトワー（勅令）を出し、バアス政権の転覆を示唆したかどで妹と共に処刑されたシーア派リーダーの大僧正は、蜂起の星だったのだろうか。

紫白の煙

牽く驢馬に相応した小さな荷車に家財を積み込み、その荷に埋もれるようにして急ぐ家族がいる。逃げるのか。逃げた先から戻るのか。昼近い太陽が車上の人々を焦がす。

目撃した馬車は二台だけ。男たち、女たち、子どもたちが、ゆったりと荷物も持たずに歩いている。逃げ出す人は幸せなのか、不幸なのか。「難民——つまり逃げ出せるのは裕福な層」と、難民問題に詳しい人に聞いたことを思い出す。

やがて大きな建物の前で止まる。アル・フセイン病院。この地域の住民の健康センターの役割を果たしてきた屈指の大病院だという。その小さな別棟に案内される。

授乳の仕方、予防接種など、育児のパネルが壁に並んでいる。小児病棟なのだろう、と、周りを見回しているうちに、私は一行からはぐれた。



病室に入ると十二のベッドはほとんど空いている。点滴を受けている三人は大人ばかり。毛布をかぶって動かない人の、毛布からはみ出た足は三十センチ近い大きさ。ひび割れたぶ厚い足の裏は農夫だろうか。

見つめる私に、高校生か、十五、六の男の子が近づいて、*He is dead.* と言いつ、*He is killed.* と言いつ直す。イラク語がわからない覆面の兵士が乱入して、入院患者を皆殺しにした、と。

「普通の市民を殺したの」「そう。みんな 普通の人を」「何人くらい?」と、さらにたずねた時、白髪のみじる男が、厳しい目で少年に注意した。少年は会話をやめた。外国人と話すことは禁じられているのだろう。

静まり返った室内に、ベッドの男の手を握りしめて声にならない声でつぶやく黒衣の女の嘆息だけが、ときれときれに聞こえる。

同行の仲間はどこに行ったのだろう。庭に回ると、風が異様な臭いを運んだ。忘れもない東京大空襲の、あの臭いだ。立ちのぼる三筋の煙があった。紫を帯びた白い煙の周りを、ネコが五、六匹。そして軒下に、黙って煙を見つめる黒衣の女たちがいた。

一本の針

大きな建物の階上で人の声がする。真っ暗な階段を、手すりにつかまりつかまり四階ま

で昇っていくと、上人の黄衣が見えた。仲間がいた。

ぱっと明るい病室。明るいはず。窓が吹き飛んでいる。バリケード代わりに使われたのだろう、マットが、ベッドの金枠が、血に汚れて散乱している。

「反乱軍はマシンガンで入院患者百三十人余りを皆殺しにして、この建物に立てこもった。覆面をした、イラク語を解さない兵隊たちだったそうです」と、上人の表情は厳しい。五階に上がると、超音波診断装置や心電計など、自慢の医療機器がズラリと並んでいた。「この地域 百万人の健康を支える、イラクでも屈指の病院だったのに、電気も水も薬もない今、医師として何の活動もできない」と、副院長は悲痛な表情。

「これが必需品なのですね」と、寺沢上人が薬棚にたった一つ残る点滴用の針とチューブのセットを日本の援助の資料に持ち帰ろうとすると、副院長は声にならない声を出して悲しげな表情になった。

「現物がなくてもわかります。品物は私が確かめましたから」と、上人の手から副院長に品物を戻すと、顔いっぱいにみるみる笑みが浮かんだ。

階下に降りると、小児病棟の、先ほどの三人の大人と死体は消え、死体のあったベッドで、五、六歳の男の子が、膝の包帯をゆすって声を限りに泣き叫んでいた。イタイヨー、イタイヨー、と、その声は聞こえた。

五十すぎ、温厚そうな院長は、ドクター・シュタインと流暢なドイツ語で話し込んでいる。そのドイツ語を聞きながら、3Cと並ぶ3B時代からベルリンとバグダッドは結ばれ



ていたこと、この国の自動車の大部分はベンツが占めていること、問題の化学兵器工場もドイツの技術で造られたと言われていることなどを思い出した。

それにしても岡田さんの知らない言語で外国人と話してもよいのだろうか。ふり向いて岡田さんの表情を見たが、院長を信じ切っているのか、シュタイン博士を信じているのか、彼は二人の長話を、意にも介さない様子だった。

銃 声

ナジャフのたたずまいはカルバラに似ている。二階をせり出して太陽をさえぎった一階のアーケードは、砂漠の国の強い陽ざしの中でも商品を選びやすい。その通路に散乱する壁や柱のかげら。表通りの商店は竜巻きの後のように局地的に荒廃しているが、表通りのすぐ裏側には女たちの姿が見える。静かな庶民の暮らしが残っているようだ。

壁と柱のスローガンはカルバラほど多くはないが、女と男の表情は、カルバラにもまして硬い。「ゴーストタウンみたい」と、長島さんがつぶやく。

焦土の記憶を持つ戦中派の私には、ゴーストタウンはオーバーな表現に思われるが、この町を流れる一陣の冷たい風は何だろう。人々は押し黙っている。目が合うとやさしい微笑を必ず返すバグダッドの人びとと違って、返す目に表情がない。ヨハネスブルグの町角の新聞売りが、そう言えばこんな目をしていた。

冷たい風を払うように、うちわ太鼓が鳴った。寺沢上人の黄色い法衣の周りに子どもたちが集まる。バクダッドの小学生のような、はじける笑顔はなかったが、あ、笑ってる。笑ってる。通りの奥のほうからも、子どもたちがぞろぞろ出て来た。ちんどん屋に群れる日本の子どものように。足もとはぞうりだったり、ハダシだったりだが。

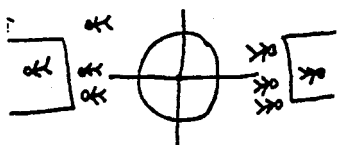
その時、兵士が空に向けて銃を射った。子どもたちよりも日本人が身をすくませてバスに急いだ。「アラビア語ができる人を必ず連れて行ってください。イラクの兵隊は外国人を邪けんに扱うと言われるけれど、それは言葉が通じないからです。そんなふうに思われるのはかわいそうです」——日本を発つ前、私に忠告したイラク人の言葉が思い出されたが、日本人たちには、ただ恐怖だけが残ったようだった。

見えない手

カルバラを過ぎて、初めて戦車らしい戦車を見た。砲身をぐっと伸ばして南に急ぐ戦車は、カーキー色というよりは濃い栃葉に近い。二台、三台、四台……。バスラはまだ戦火がおさまりきっていないのだろうか。

兵士を満載したトラックは北に向かう。これは闘い終えた戦士たちだろう。有蓋の屋根の上には、いくつかのお棺が積まれていた。

「あそこがバビロンの遺跡です。あそこにも反乱軍が立てこもった」



ナジャブでUターンしてまもなく、岡田さんが右手を指さす。何やら小高い遺跡らしいものが見えるが、遠く霞むそれは、破壊されたのか太古からの風化か、私には見定めるべくもない。

カルバラとナジャブの衝撃の疲れか、車内には寝息が満ちている。さしもの寺沢上人も、前後不覚のごようす。私はただ一人目を覚まして、見え隠れするチグリスの流れ、所どころに群生するナツメヤシ、小さな石造の民家などを、ぼんやり、見るともなく見ていた。後味が悪かった。

二月の終わり、ブッシュ氏はイラクの民衆、とりわけシーア派とクルド族に呼びかけた。「今こそ立て！ サダム・フセインを倒せ！」

「覆面をしたイラク語を解さない兵士」が何を意味するのか、私にはわからない。その話の真偽のほどもわからない。しかし、目の前で、人間に、同じく人間である肉親を撃たれた心の傷は、生涯消えることはないだろう。オキナワの人の嘆きが永遠に深いように。

あの黒々としたスローガンを書いた人、消した人。地域のシーア派の中に立ち上がる人もいただろうが、あれだけの戦闘になるのには、武器を供与した陰の力があつたことは、ほぼ間違いない。制空権を完全に制圧された砂漠。国土の一五パーセントに、今も連合軍が駐留しているイラク。どのような手段でも、講じようと思えば講じられるだろう。ほんとうの地域民による反乱なら、地域住民の命を守る病院を戦いのとりでにするだろうか。キルクークからさらに南へ、バグダッドにも迫る勢いと伝えられているクルド族は、そ

の後どうなったのだろう。イラン・イラク戦争の時にも、イランの教唆で反乱に立ち上がったクルド族は終局的には見捨てられ、以前よりもはるかに悪い状況になったと聞いているが、今度は……。

クウェート解放にことよせて、バグダッド目ざしてイラク領内になだれこんだ連合軍は、なぜか途中でバグダッド制圧を思いとどまった。国際世論を恐れて、「内戦の黒幕」に方針転換したのだろう。そして、それに呼応したシーア派は敗れた。クルド族は勝ち残れるだろうか。どちらが勝っても負けても深い憎しみと憤りが百年単位で残るだろう。

レバノンで、エチオピアで、ニカラグアで、カンボジアで、内戦はがん細胞のように双方の人々を蝕んだ。自らは表に立たず、人々を陰であやつる黒い手。

時々刻々、スポーツ実況のように映し出された戦闘を見ていても、今度の戦争は見えなかった。バグダッドの町角に立っても、今ひとつ見えないもどかしさがあった。真綿で首を絞めるように、水を止め、電気を止め、電話を止め、郵便を止め、バスを止めて、ジワリと殺す殺し方。反乱の徒をふるい立たせて、黒幕はダンスホールで踊る。サニタリー・ウオー(きれいな戦争)の陰の、汚い手が誰にも見えない怖さに、思わずからだが震えた。

「制裁死」の順序

バグダッドに残って市民生活の調査に専念していた田宮・辻・湯浅の三人組も、私たち



とは別の疲れ方をしていた。

「子ども病院で、話を聞いていた栄養失調児たちを見た。大きな目、乾いた皮膚、おなかのふくれた乳幼児たち。嘔吐と下痢が続き、それが栄養失調に拍車をかけている。下痢は汚水による感染に発しているが、健康なら発症しない細菌に対する抵抗力がなくなっていることが問題で、下痢止めや抗生物質を使っても救いようがない。経済制裁の非人道性がわかった」と、暗い表情だった。

国連の決議では、医薬品と乳幼児の食糧は経済封鎖から除外されているはずだが、実際にはヨルダンのアカバ港に着いた救援物資を積んだ北欧などの船は、国連の名で停止させられたままとのこと。フセイン政権が続く限り経済制裁は続けると、アメリカもイギリスも声明を出し、連合軍に加担した他の国々も、その勢いに抵抗できずにいる。「経済封鎖で最初に死ぬのは赤ん坊、それから幼児、子ども、老人、病人……。サダム・フセインが死ぬとしても最後になるのに」と、田宮さんは、吐き捨てるように語った。

「子ども病院も例外なしの停電で、未熟児の保育器も手術室も使えないんです。ワクチン類を保存する冷蔵庫もないんですよ。非常用の発電機で緊急時にだけ給電しているのですが、常時使うはずではない発電機を酷使したため、こわれる寸前。いつまで使えるのか、明日にも動かなくなるかもしれない、と心配してました」——辻さんの報告も暗かった。

「下町の闇市は人、人、人だけど、見て歩くだけで、買う人は少ないみたい。何しろすごい値段だから」

「タバコは一本ずつのバラ売りなの。一箱単位じゃなくて」

「だけどもんな、すごく明るいんだな」

「アル・ラシッドが丸の内だとすると、台東区か足立区という感じがしら」

「もっと奥には、ほんとに困っている人が住んでいる地区もあるという話だけど、囲いがあって見られない」

「闇市にも出かけられない人たちは、おなががすききって、暴動寸前といううわさもある」

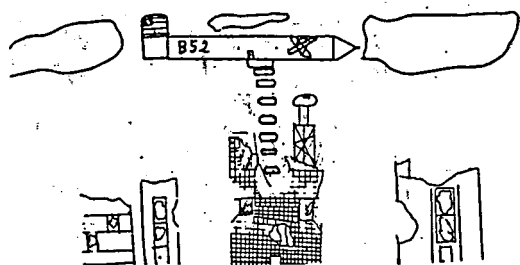
「市場でゴミを見つけて写真を撮ったら、なぜこんな汚いものを写すのかって、とても悲しそうだったわね」

「物乞いもいた。一人だけど」

「からだが二つになるものならぜひとも行きたいと思っていた下町の様子が、間接的ながらうかがえたのは、カルバラ行きを断念した三人のおかげだ。」

「チグリス川の、共和国橋に近寄って見たら、大きな牛の死体がぶかぶかと浮かんでいたのよ。市民は、知らずにあの川の水を飲んでいるのかしらね」

それにもましてショックだったのは、ある学生に出会ったことだという。フセイン政権下での反政府活動家に加えられた弾圧を語り、亡命の相談まで持ちかけられた、と、いつ



恐怖の記憶

も比較的冷静な三人も混乱していた。「この国に生きていたくない」という青年のことは、同年配だけに、三人にはことのほかこたえたようだった。

四系統と伝えられる秘密警察の廃止、情報の公開は、いずれ行われるだろうが、それには内戦の解消がまず必要だろう。私は人民を解放したと信じられているキューバで、やはり亡命志願者が近づいて来たことを思い出した。それにしても東欧と言ひ、ソ連と言ひ、社会主義がなぜ国家主義に変質したのか——。社会主義こそ、平等と自由を実現すると思ひ込んでいた学生時代の友人たちの顔を思い出し、日本ではまだ本格的に行われていないその問題についての論争を聞いてみたい気持ちになった。

辻さんは、小学校の子どもたちの絵を回収した。

小さな花を描いた一枚と、描いては消し、消しては描いた消しゴムの跡だけ一枚を除いて、すべて、テーマは戦争だった。

「戦争を描いて、と頼むのはぶしつけだと思って、いま一番心に残っていることを描いて、と頼んだのですけど、やっぱり戦争なんですな」と、愛用のバイクを売ってこの旅に参加した辻さんは感慨深げだった。

ビルよりも巨大な飛行機から、じゅず玉のように爆弾の雨が降っている。おなかをパク

ッと開けた感じで二つ折りに倒れるビル。あちこちにあがる火の手。どんなにこわかったことだろう。

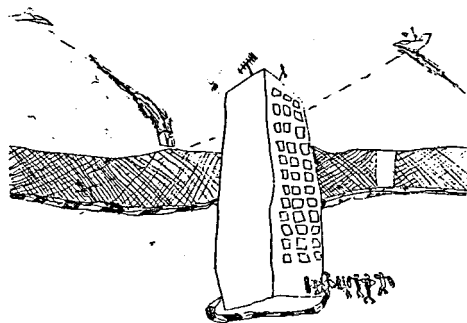
四十一枚のうち二十二枚は普通の鉛筆で描いた絵。彩色の十九枚も、色鉛筆だったりサインペンだったり、一人ひとり画材が違う。文房具が不足しているのだろう。日本の児童画に比べると、五年生の絵にしてはどれも線が細く、弱々しく感じられるのは、元気がないのか、色彩たっぷりのクレヨン画はほとんどないからか。

カメラやテレビの周りに群がり、写して！写して！とせがんだ子どもたち。イラーク！イラーク！ サッダーム！ サッダーム！ と、校庭いっぱいに明るい歌声を響かせた子どもたち。どの子からも、かげり一つ感じられなかったのに、「学校が始まってうれしい」という絵は一枚もなかった。

戦中派の私にとって印象的だったのは、その恐ろしい爆撃機に、“B 52”と書き込んでいた子どもたちがいたことだ。四十六年たっても忘れもしないB 29、P 51。同じように、この子たちは、五十年たってもB 52を記憶していることだろう。

朝の勤行

眠れなかったのに、早く目覚めた。見たいこと、見なければならぬことかと思いがあふれて、一人で動き回れるものなら五時からでも歩きたかったためだろう。



窓を開け放つと、庭園のはるかな隅に、上人の黄衣が見えた。朝の勤行だ。長島さんも参加している。日本からのじゅずを手には、私も庭に回る。

むしろを敷き、仏舎利の入った大きな仏龕の前に、上人と長島さんは念仏に余念がない。その後ろで、南無妙法蓮華経、私も唱和する。信心深い生家で、般若心経や修証義をそらんじて育った私だが、キリスト教でもイスラム教でも法華教でも、人が祈る心の本質に変わりはない、自分の宗派だけが正しいと思いきまないことだ、というのも、繰り返し聞かされた親の教えだった。ナムミヨーホーレンゲキョーは、八二年のニューヨーク平和大行進でも世界の人びとが唱和していた。ナムミヨーホーレンゲキョー。朝の大気の中で朝陽に向かって手を合わせながら大きく声を出すと、戦争中からの、そして今もくつろがぬ心が、少しは安らぐように思える。

「あ、これが砂漠で食べていた草です」

ホテルに向かいながら、上人は道端の、三つ葉に似た小さな草を指さした。つまんでみると、かすかな香りがある。口に入れると、三つ葉と芹の間のようなおいしさだった。

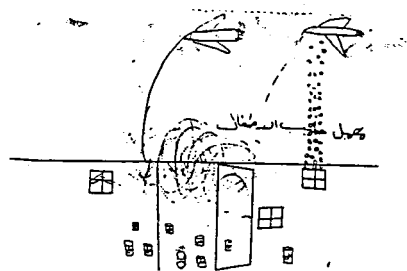
「これくらい若い葉は食べられます。もう少したつと食べられなくなる」——その食べられなくなった葉を煮て食いつないでいた、最前線のイラク兵の話になった。

「九一年一月十六日、ピーステントにやっと着いてうとうとはじめてまもなく、アメリカ人のメンバーに「爆撃が始まった」と、揺り起こされたんです。あわてて外に飛び出

して見ると、新月の闇の中、キャンプの真上を爆撃機が飛んでいく。火の手が上がったのか、バグダッドの方向がほの明る。急いでBBCの放送にかじりつくと、「爆弾、爆弾、爆弾……雨あられと降ってきます。まるで爆弾の雨です」と興奮した声が聞こえて茫然としました。自分としてはただ祈るほかなく、日の出、日の入りには砂漠の丘に上がって動行しましたが、その姿をじっと見ていたイラク兵たちが、やがて声をかけてくるようになり、フットボールをして遊ぶ仲になったんですよ。彼らは爆撃機をイラク軍機と思い込み、「敵をどんどん攻めている」とのんびりしていましたがおなかは空ききっていたのでしょね。テントを撤去する時、残りの食品を分けてあげると、ものも言わずに夢中で食べたことでよくわかりました」と、上人は二か月前を振り返って、

「イラクは、政府も市民も、最後まで戦争を避けたい一心でしたが、あれだけの大軍に囲まれて退くこともできない、どうしようもない立場でした。戦争調定機構をひたすら渴望してたのに、国連も機能しなかった。海部さんが中東を訪れた時は、特別機まで用意して使者を出したのに拒絶された。日本人もヨーロッパ諸国の人も、いろんな人がバグダッドに来て、人質解放を計るだけで、アメリカを説得する努力はしない。こうなれば世界の平和を祈る人間が非暴力で訴えるほかないと、AGPTVでピーステントを張ったのです」

ハガルフピースティームVの構想は、実は私たちの構想と全く同じだった。私たちはよく話し合った。「こうなったら女たちで、人間の鎖をサウジ国境に張るほかないわね」



と。ピーステントの構想を知っていたら、みんな飛んで行ったらう。△草の実▽△戦争への道を許さない女たちの会▽△婦人有権者同盟▽△主婦連▽△地婦連▽△日市連▽△日青協▽△日生協▽△YWCA▽△不戦兵士の会▽……、即時停戦に向けてなりふりかまわぬ行動を続けてきた仲間たちの顔を思い出した。世界各国から数万の活動家を集めることも不可能ではなかったらう。その時は国連も無視できなかったらう。いま一歩が足りなかった悔しさ。

せめて野党だけでも即時停戦決議を出してほしい、と、署名の山をかかえて国会に日参したことを思い出す。すべては後の祭り。足りなかった一歩の重さを、私は生涯、我が身に課さなければなるまい。

ある母と子

アンマンでヨルダン赤新月に託した救急医薬品のコンボイが到着した。医薬品が本当にイラク赤新月の手に渡るのか、そこから公正な配給ルートにのるのか、それを見届けるのも、私たちの重要な任務だ。午前中、厚生大臣が訪れるという。大臣に会ってから赤新月へ、が今日のスケジュール。

大臣を待つ時間を惜しんで、私と田宮さんは、アハド・ジャディード小学校の先生が手配して下さった家庭訪問と、ハイラク女性連合▽訪問を果たしたい、と上人に願い出て、

岡田さん抜きでタクシーに乗った。

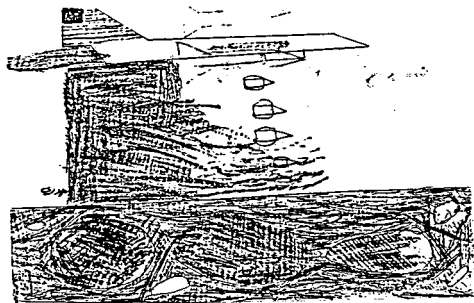
アハド・ジャディード小学校は、あの日の歓声がうそのように、ひっそり授業が続けられていた。中年の女の先生は、お待ちしていました、と、目のくりくりした利発そうなムハマド君を呼び入れる。この子もお母さんも、”とても英語が上手なので”紹介する、という説明に、それでは平均的なイラク人の生活はうかがえまいと、少々がっかりしたが、考えてみればアラビア語しかわからない人を紹介されてもインタビュのしようもない。

九歳だというムハマド君は、迷彩服の端切れでつくったかばんを振り振り、我が家に案内してくれる。

アハド・ジャディード小学校の子どもたちは、揃って服装も良ければ顔色も良かったので、選りすぐった遠隔地からも子どもを集めた名門校ではないかと疑っていたのだが、ほんの二、三分で、ムハマド君の家に着いた。

玄関にはふさふさした毛並みの、大きなセッター。ドアを開けると、客間のだんろの上に、ムハマド君の背丈よりも大きいフセイン大統領の顔写真が飾られている。ふかふかのベルシャじゅうたん。テーブルの上には、つやつやと輝くばかりのオレンジが、大きな籠に山ほど。黒いワンピースを上品に着こなしたアルカティーズ夫人は、上手な英語で私たちを迎え入れる。滞米四年の外交官夫人とのこと。

「食糧も 何不自由ないし、電気も水も来ています。時間給水ですが、屋上のタンクに貯水してあるので不自由はありません。あと二週間もすれば、電気も水も、完全に元に戻る



でしょう」

「それは誰が言ったのですか」

「雑誌に書いてありました」

「その雑誌の名は？」

たたみかけて田宮さんが聞くと、夫人は下を向いて黙った。

「ムハマド君は何になりたいの」

「パイロット」

「わあ勇ましい」

「クラスみんなもそう言ってるよ」

「戦闘機に乗ってブッシュをやっつけるんでしょう」

と、そばからお母さん。

外交官夫人は、おつれあいと昨夜『想定問答集』でも学習したのだろうか。思わず田宮さんと顔を見合わせた。

東京プアーにはまばゆい4LKの二階建てはちり一つないほど清潔で、浴槽にも水が満たされている。

ついに口にしなかったオレンジを、夫人は帰ろうとする私たちに一つずつ差し出した。二人を送りがてら、学校に向かうムハマド君に、さりげなく聞いてみる。

「戦争の間、怖くなかったの」

「ぼく、ほんととは、とっても怖かった。うちの誰かが死ぬんじゃないかと思って」

タクシーの中でオレンジにかぶりついた。それは今までどこの国でも一度も味わったことがないほど甘くジューシーで香り高かった。

「無理をしたんでしょうね」

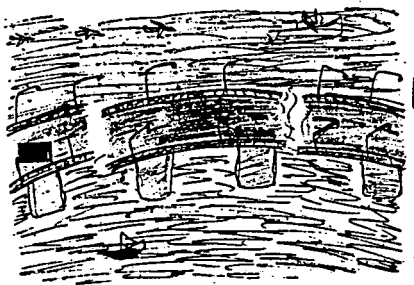
「特権階級だから物資があるのだとしたら、亡命志願者が出るのも、わりはない……」

田宮さんと話し合いながら、寝そべっていたセッターの、見事な毛並みを目に浮かべた。

△女性連合▽

△General Federation of Iraqi Women▽は、ぜひ訪ねたほうがいい、と出国前、イラク人の知人は言い、そこを訪ねたある大学の女性教授は、「行ってもつまりませんよ」と言った。「型どおりの話しか聞けず、型どおりの所しか案内してくれない」と。

電話もない、郵便もないなか、予約なしの訪問だったが、それでも訪ねたのは、イラク人の知人から△女性連合▽はバアス党の組織だけれども、バアス党べったりではない。バアス党の中では一番民衆の感覚に直結している。救援物資なども、あそこに届けると、多分どこよりも公正に配給されるだろう、と聞いたためである。彼はまた、イラクの女性には日本以上に解放されている。すべての職業に自由に就けるし、有給の育児休暇が最低一



年はある。職場には保育所が完備している。進学率も高く、大学でも女子学生は一般に男子より成績が良い。戦後のイラクの復興を担うのは女性だと思う、とも言った。

バアス党の下部機構は、日本の社会党などと同じく、社青同とか婦人会議のような部門があり、△女性連合▽は、日本の社会党で言えば、婦人局と日本婦人会議の 中間くらいに当たるようだった。

かなりの距離をタクシーが走って、ほとんど市のはずれかと思われる所で降りた。

りっぱとは言えない建物の門前には、八十歳くらいかと思われる見事な白髪の兵士が銃を持って番をしていたが、「ネコに銃」という風情だ。

受付もない中を、どンドン奥に入って行くと、五十過ぎぐらいか、日本で言えば △婦人有権者同盟▽ のメンバーといった感じの女性が、驚くでもなく迎え入れてくれた。

私は東京大空襲の経験で、米軍の弾丸が自分のからだに刺さるように感じて、湾岸戦争の間じゅう心配で眠れなかったことを話し、日本がどこの国よりも調停可能な位置にないながら、私たちの力及ばず開戦を止め得なかったことを詫びた。

「ビープルとガバメントは違う」と、その人、アンタルスさんはやさしかった。

救援物資を今後も送りたいと思っているが、必要だろうかと聞くと、それはほんとうにありがたい、あらゆる物資が底をついて困りぬいている、と、しみじみと語りだした。

「電気・水道・電話・郵便・交通機関、どれもまるで復旧の見通しが立たないんですよ。社会の基本的な設備も生産工場も徹底的に破壊し尽くされてしまっていますね。新しいプラ

ントがほしいですね。とても修理すれば直るといふ状況じゃないんです。私はそれでも比較的恵まれているほうだけど、その私でさえ、ほんとうに苦しいんです。まして赤ちゃんや幼児のいる人の苦労は、それはもう……。戦争を経験されたあなたにはわかっていただけるかもしれないけれど、赤ちゃんがおっぱいに吸いついても、おっぱいが出ないんですよ。お母さんも栄養失調ですから……」と。

責任者らしい、やや厳しい表情の、イラクのことばしか話せない年かきの女性は、彼女のことばにいちいちうなずいた。

うつろな目の少年がかたわらにいて、表情ひとつ変えない。

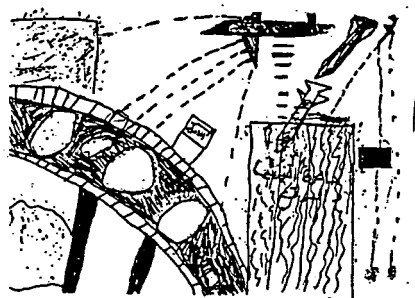
「この子は、両親とも亡くしてしまってますねえ」

私は同僚の真田さんが折ってくれた千代紙の折りびなをさし出し、これも日本からの、桜の花の塩漬けの小瓶のふたをあけた。

「この一ひらをお茶碗に入れて お湯を注ぐと、桜の花の姿に戻り、桜の香りがします。この前の戦争で、日本は全くの焦土になり、口に言えないほど大変でした。でも、何とか復興しました。どうか元氣を出してくださいね」

思えば私は、この一言が言いたくてイラクに來たようなものだった。

田宮さんと二人で『さくら』と『隅田川』を合唱した。いい年をしてこんなバカな……と思いながら、こんなバカなことが通じそうな人たちだった。時間があれば、夜を明かしても語り合いたかった。



ふりそそいだ金粉

予定をオーバーして話しこんだ私たちは、一行が待っているはずの赤新月に車を急がせたが、赤新月と言ったのに、ICRC、国際赤十字に運ばれた。英語がよくわからないらしい運転手に、私は仕方なく、紙に赤い三日月の赤新月のマークを書いて渡すと、やっとどり着けたが、私たちを待ち合わせているはずのバスは見えない。十五分ほど前に出発したという。ICRCなどに間違っただけで、と昨日もその運転手にさんざん誤運転をされた田宮さんの怒りはおさまらない。ガソリンのないバグダッド。タクシー代は、私たちにあって目が飛び出る金額だった。

問い合わせようにも電話がない。ホテルに何かの伝言が残っているかも……と、一応帰ったが、伝言はやはりなかった。

夕方、帰り着いた一行は、みんな、ざらざらとした顔で、口をきくのもおっくう、という表情だった。

「待っていた厚生大臣は、ついに現れなくて、ほとんど午前中を棒に振ってしまったの。赤新月の伝達式も、時間だけかかる形式的なものだったし。それから発電所とアメリカ・シエルターに行ったけど、発電所はほとんど全壊状態で、いつ復旧するのか、所長も茫然としてたわ。アメリカ・シエルターは、聞いていた以上の惨状で、みんな言葉も出な

かった。真っ暗な中に灰だけが積もっていてね……。私は思わず泣き出してしまったの。壕の外に出てみると、からだじゅうに金粉のようなものが貼りついてたのが不思議だったのだけど、新型爆弾なのかしら」

いつも雄弁な長島さんも言葉少なだった。

バグダッドの町はずれのアメリカ・シエルターから運び出される遺体をテレビで見た時、私は思わず、画面からあの臭いがしたように感じたことを思い出す。焼き肉に近い人がいた。黒く焦げた手足がチラと見えた。一瞬の画面から、私は実像を想像できたが、若い人たちは、多分、その時はそこまでは見えなかったろう。戦争を知らない世代の人たちは、初めて現場に立って、さぞショックだったろう。

上人の怒り

いつも配慮の行き届いている寺沢上人が、私たちのことをすっかり失念していたのは、上人には珍しく、頭から湯気が出るほど怒っていたからだという。これで二度、大臣に待ちぼうけを食ったこともこたえたが、原因は「岡田さん」だ、と長島さん。こともあろうに岡田さんが、上人の虎の子の百ドルを盗んだというのだ。そう言えば、今朝は岡田さんの顔を見なかった。私たちが出たあと、遅れて現れた岡田さんは、上人から預かっていた風呂敷包みを返したが、百ドルが抜き取られていたようだ、と。



盗難云々は定かではないが、何かの問題があったのは事実だったようだ。上人と顔を合
わせると、「この国は滅びます」——いつに似ぬ激しい口調だった。具体的な話は出なか
ったが、役人の道義が地に堕ちた、と、怒りは尋常一様ではない。

「岡田さんたち、情報省の役人は 戦争中、飛ぶ鳥も落とす勢いだったんですよ。私は一
月にもあの人に出会ってません。サウジ国境近くの前線からバグダッドに連れ戻されてみ
ると、街は一変してまして、空爆前はひどいラッシュで車が動けないほど道路にあふれて
いたのに、走ってる車がない。あるのは 乗り捨てられた車、焼け焦げた車だけ。アルラ
シッド ホテルの六階に泊まることになったのですが、シャンテリアは取りはずされ、窓
という窓にはガムテープが斜め十字に貼られていました。爆風対策だったんですね。毎晩
のような空爆。停電で真っ暗な室内から、花火のように上がる対空砲火が見えましたが、
大音響と目くらむ光がホテルを照らし揺さぶって、このホテルにもいつ爆弾が、と思い
ました。空襲警報が鳴ると、階段を駆け降りて地下壕に入のですが、全体像がわからな
いほど大きな壕で、市民も逃げ込んでましたよ。地下壕のさらに下には大統領の地下司令
室がある、といううわさで、情報省、特にあの岡田さんの監視はとても厳しかったのです。
彼は、ソ連のジャーナリストたちと一緒に、爆撃されたミルク工場などを案内してくれ
ました。工場はメチャクチャに破壊されていましたが、たしかにイラク側の発表どおり、
ミルク工場のようにでした。しかし周囲には迷彩を施した工場がたくさんあり、一般施設の
中に化学兵器工場などを巧妙に配しているようにも思われました。本当のイラクの姿が見

たくなり、同室のソ連人ジャーナリストと市内を回ろうと、彼の知人のイラク人の白タクで二、三時間、市内を動き回ったんです。水も電気も電話もない市民生活の悲惨さを実感してホテルに帰り着くと、あの人は髪を逆立てんばかりの勢いで私たちを叱責し、スパイ容疑をかけたんですよ。この国でスパイと疑われることは死を意味します。一卷の終わりかと思った時、騒ぎで駆けつけた兵士の中に私を知っている人がいて、彼のおかげでようやく放免されましたが、あの吊るし上げは生涯忘れられません。あれほどの糾弾をする人間は、品行言動、すべて人々のかがみでなければならぬのに、道義は今や地に墮ちました。今度も、私たちが到着するとすぐ、ドルをイラク・ディナールに替えさせてくれ、とせがんだのですよ。イラク・ディナールが公定の六分の一か七分の一に下落していることは、私でも承知しているのに、公定で替える、と。この国の規律は厳しすぎるほど厳しく、上に立つ者はそれなりの筋を通していたのに、それが崩れるようでは、もはや再建は望めません」

とまで上人は言い切った。

私たちが隠語として使っていた『岡田さん』を上人がいつのまにか使っているのがおかしかった。そして、カルバラからの帰り道、もうバグダッドに近いころだったが、前の席に座っていた岡田さんが、急に背中をまるめてからだをひねり、下から仰ぐように私の顔を見て、「ワーニャー」と言ったことを思い出した。日ごろのきりっとした顔に似ず、ネコのような岡田さんに私は戸惑った。「ワーニャー？」と聞き返した時、「水。……誰か、



水を持ってませんか」寺沢さんの声。ウォーターだったのか、と気がついたが、鼻を鳴らしてすり寄った岡田さんの声は、私にはニャーとしか聞こえなかった。両替えを上人に申し出た時も、あんな顔、あんな声だったのだろうか。戦時中との豹変に、上人が激怒したのもわりはない、と、常ならぬ上人の乱れようを納得したが、戦時下の日本は「星にイカリに顔にヤミ」、十代の私の心に刻まれた無数の「岡田さん」が日本にもいたことを、思わないではいられなかった。

黒い喪札

カルバラからナジャフへ。バグダッドから南には二百キロ近く下ったが、北の状況は依然としてわからない。クルドはその後どうなったのか。バグダッドから北にはどんな風景が開けているのか。バグダッド市中でも見残しているものは山ほどある。

しかし、寺沢上人の心は、早くもイスラエルに飛んでいた。復活祭に、アンマン―エルサレム間八十八キロの平和行進を、というのは、上人の悲願だった。

思えば私たちがバグダッドに向かったのは、春の彼岸だった。バグダッドに着いた朝、私が「きょうは亡父の祥月命日です」と話すと、上人はパッと顔を輝かせた。根っからの宗教者なのだろう。私たちは暦を何月何日と読むが、上人の暦には、彼岸、復活祭、といった色が塗られているように感じた。

イスラム教とユダヤ教を結ぶ平和行進は、話を聞いた時から胸おどる企画だったが、若い人たちは、必ずしも感心していなかった。なぜ復活祭にこだわるの、それよりは、もう一日でもイラクにとどまりたいという気持ちは、私自身の気持ちでもあるが、「イスラエルを見なければ湾岸問題は見えず、この旅の意味がない」というのと同じ程度に、「復活祭でなければ平和行進の意味がない」と、上人はこだわった。

「ヨルダン峡谷を降り、登りながら祈るのです」と、八十八キロの行程を語る上人は、少年のように顔を輝かせて、まさに法悦の人だ。

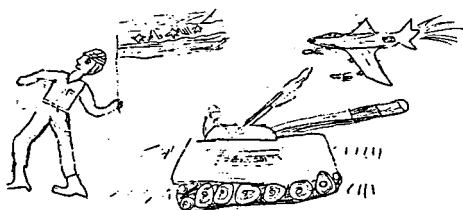
出発は、二十八日と決まった。

二十八日の朝、私は田宮さんと、見残したアメリカ・シエルターを、TBSの車に乗って訪れた。これだけは見ておきたかった。

バグダッドの街はずれに近いアメリカ地区のこのシエルター爆撃は、多数の民間人死傷者の姿が全世界に放映されて話題を呼んだ。

シエルターという名称から、私は何となく地下壕を想像していたが、金網をめぐらした平屋だった。平屋といっても、屋根の上に中二階と言ってもいいほど厚いコンクリートの層がのっている。弾丸を通さない構造と信じて造られていたようだった。

内部のものを取り出したのか、建物の周囲には無数の屑鉄が積まれている。入り口に入る。鼻をつままれてもわからない闇の中に一筋の光が見える。



天井にぽっかり開いた穴はほんの二メートル四方ほど。この小さな穴をぐぐりぬけた二発目で、内部は灰燼に帰したという。ピンホール爆撃の跡を、建物の外側からは何度も見たが、なまなましい内側を見るのは初めてだ。

兵器には全くしろうとの私だが、二発目は、核にも似た一種の熱放射爆弾だったのであるまいか。外壁には何の傷もないのに、中には灰が厚く積もっている。天井にも壁にも灰は貼りついているのだろう。テレビのライトが照らした時、長島さんが話した「金粉のようなもの」が、天井から床に降るのが見えた。

惨状に思わずカメラを落とし、二度と撮ろうとしなかったというフランス人カメラマンの話、「死者は何人か数えるすべもない。ハムみたいな塊だった」と語ったアルジェリアの医師の話。――すべて恐らくそのとおりだったのだろう。

イラク政府は、「千人入っていたが死者は五百人か。調査中」と発表し、地域の住民は、死者千五百人と主張しているというが、「数えようもなかった」が、恐らく真実であろう。出口には、まだ片づけきれないのか、赤ん坊のおしゃぶりやら、十センチたらずのかわいい靴下やら、口紅、血痕の残るベールなどが散乱している。田宮さんは、それを拾ったかたみを探しに来る人が……と、一瞬思ったが、それを拾って日本の仲間に伝えようとする彼女の気持ちも、痛いほどわかった。

赤い大きな消防車が二台、地下の水を汲み上げ始めた。

地下は一階とも二階とも言われている。そしてその下に「重要人物」が潜んでいたとも。

それを検証すべくもないが、二台のポンプで汲んでも汲んでも、水は容易に汲み上げきれないように見えた。

シェルターを囲む金網にしがみつくように、黒衣の女たちがいた。「たまたまその夜は急病人の看護に追われて入れなかった。入った家族の死体はまだ出ない」と、その一人は語った。みんな、毎日祈りに来ているのだという。女たちはおし黙って、身じろぎもしなかった。

周囲の家々の塀に、黒地に白く、何行もの文字を書いた板が貼られている。「あ、この家は七人、ここは五人」。運転手が指さしながら説明する。死者の名が書かれているのだろう。いつまで掲げておくのか。私はふと、「名誉の家」と記された木札を表札のそばに掲げた、戦時下の日本の風景を思い出した。表札をはずす日が来ても、心の中の喪章は、永遠に消えまい。

記者会見

深夜、ふたたび国境を越えて、アンマンにたどりついたのは二十九日の朝、四時。

渋谷・日野・大山のバーレーン三人組が、寝ずに待っていてくれた。口下手だけれどやさしい三人は、昨日の日中は、ヨルダン国境まで迎えに行ったという。



バーレーンでは、警戒する連合軍の監視艇に追われて命からがらの場面もあったが、ともかく潜った。今度の戦争で流出した原油は、まだバーレーン沖にはなく、イラン・イラク戦争当時の古く固いオイルボールを採ってきた、という三人の話を詳しく聞く間もなく、一同は倒れるように眠った。

昼すぎ、アンモンホテルで、在アンマン日本マスメディアを迎えての記者会見が開かれた。ほとんど活字媒体の方だったが、朝日・毎日・サンケイ・東京・共同など、俊秀そのものの印象の男性記者たちのシュート（報告に対する反撃）は手きびしかった。

“覆面をしたイラク語を解さない兵士”の話は、“情報官にあやつられたしろうとの話”と一蹴され、“官僚の道義は地に墜ちた”という寺沢上人の話に関心が集中した。「イラクは、手も足も縛られて無数の弾丸を射ち込まれた。広島の二倍の量の爆弾を、四十五日間にわたって毎日落とされ続けたのです」と口ぐせのように言い、イラク擁護に終始していた上人のこの発言に、私は内心驚いたが、それだけ上人は裏切られた思いが深かったのだろう。関心を示した記者たちも、バグダッドに在任中、情報省の検閲官にはしぼられたようだった。

カルバラとナジャフの惨状も、みんなが知リたがった。上人は「両市とも『瓦礫の山』と表現し、長島さんは『ゴーストタウン、兵士が銃を発砲した』と報告した。私は、『初めて戦場の跡を見た方はそのようにお感じになったかもしれないが、戦中派の目から見

と、むしろ「損害軽微」という印象でした」と報告した。（翌々日、日本からFAXで送られて来た新聞には、「カルバラ・ナジャフは瓦礫の山」の大見出しがつけられ、「兵士が発砲」と記されていた）。

それぞれの答えがバラバラだったのは醜態だと、渋谷さんは怒った。そもそも記者会見はみんなの好まないところ。折あることにPRすることが救援活動を広げることになるという上人の思いとは当初から食い違っている。その日のミーティングは、ちょっとした「寺沢糾弾集会」の雰囲気になった。私は「年代も職業も違う個人が同じ報告をする」とすれば、かえって怖い。意見に多様性があったのはよかったと思う」と発言した。

上人は沈黙して誰の声にも一言も答えなかった。

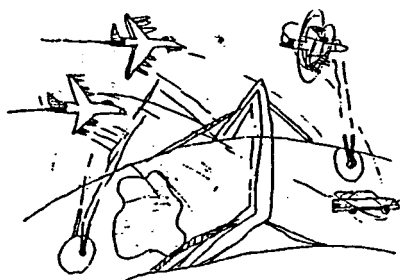
その夜、上人は一人法鼓を打ち鳴らして、平和行進に発った。ホテルの掲示板には次のような紙が貼られていた。

「あなた方は一人で来られたわけではない。なぜ平和行進に行こうとしないのですか。
イスラエルに行かなければ、中東問題は見えません。」

寺沢潤世

死 海

私たちがイラクに行っていた間に、日本から松脇上人が到着していた。平和行進のためにヨルダンに入った松脇上人は、寺沢上人と同じ日蓮宗妙法寺。まだ二十代。色白の顔に



輝く大きな目。少年のようなういういしさ。「上人」とは称号ではなく、僧籍にある人の敬称です。他派で和尚というようなものと、少し恥ずかしそうに答えた。

三十日早朝、一人、平和行進に出発した寺沢上人は、その夜遅くホテルに帰り着いて、短いまどろみの後に、翌早朝、今度は松脇上人やインド人のガンジーさんと、ヨルダン峡谷に向かった。

△GPTVの他の面々は、ヨルダン領内の行進は宗教者以外は許されないと聞かされて、イスラエル領内での行進の準備に余念がなかった。

まず、中東情勢の基本的な学習会。著名な専門家が講師とのことだったが、私は、渋谷さんに誘われるままに死海にドライブした。

本を読みながら浮いていられるという死海は、ぜひとも行ってみたかった所の一つ。それがアンマンの近くにある。バーレーン三人組の車に、幸運にも一人分の席が余っていたのだ。

ヨルダン峡谷を左に見ながらの行程は以外に近く、一時間あまりで死海だった。

むかし海、今は大きな湖の穏やかな湖面は、見ると飛び込まずにはいられない。ズボンにシャツの着のみのまま入る。ふわふわとからだが浮く。立ち泳ぎから背泳ぎの姿勢に入ろうとすると、平衡を失って大きな水しぶきをあげた。

強い塩分を含んだ水は刺すように痛い。しぶきの入った目は涙があふれ出る。痛いけれ

どもそれが目に効く、と土地の人は言う。

背中を水に浸すと全身が海面に浮いた。「本が読める」も、うそではなさそうだった。今も飢え、毎日誰かが「戦後死」しているイラクのことを思うと、束の間とはいえ悠遊の時を持つことが申しわけない気もするが、温かい水に洗われると、人ごこちつく思いがするのも事実だった。

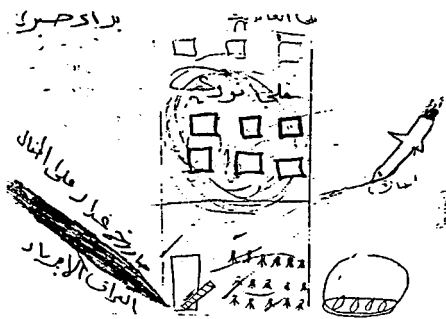
帰り道、夕陽に染まりながら行進する上人の一行にばったり会った。一日じゅう陽に焼けて、松脇上人は、真っ赤なトマトのようにかわいらしかった。

非暴力トレーニング

△GPTVのイスラエル入国準備コースの中で、これだけは欠かすなと言われていたのは、非暴力トレーニングだった。フェミニストたちがよく行うトレーニングに類似したものだろうと、講義はスキップしたが、実技編は受講した。

輪になって回る。突然笛が鳴る。そのまま静止する。急変が起きても心もからだも乱さない訓練が終わると、身長・体重のほぼ同じ二人ずつが組になるようにとの指示。英国人にしては珍しく小柄なマギーと組む。

一人が立って、「ノー」と言い続ける。膝を折ったもう一人は「イエス」と言い続ける。相手に巻き込まれない訓練だろう。



終わって、非暴力をどうイメージするか、ことを求められる。多くの人が「愛」と答えた。「自分自身をリラックスすること」と私は言った。

フェミニストのトレーニングでも、非暴力は重要なテーマになっている。右の頬を打たれたら左の頬を出し、決して憤らない。平和の達成はこれ以外にない、というのは、フェミニストの信念でもある。

貫き通すためには、「自分が殺される」ことも覚悟しなければならない。事実、命を落とした非暴力平和運動家は少なくない。死ねば聖者になる、というムスリムの考え方とは違うが、多分その死は何かの意味を持つものになるだろう。よしんば意味を持たなくても、力に対抗して決して力をふるわない。その結果が、死というかたちで報われることも多い。といって、非暴力に徹するとは、進んで死ぬことでは決してない。できるかぎり自分の生命を尊重する。自分の生命を大切にしないで、他人の生命を尊重できるはずがない。

イスラエルへ

イスラエルの入国については、さまざまなことが取り沙汰されていた。

入国管理局での荷物のチェックが厳重を極めている。印刷物、ノート等、いっさい持ち込んではいけない。カメラやビデオ等も不可。人によってはパンツまで脱がされる等々。

寺沢上人もパンツを脱がされたという。戦時下のイラクに二度も入国しているパスポー

トの記載で、スパイの疑いを受けた、と、思い出すのも身ぶるいするようすだった。

それでも、「若い人たちも、ぜひともイスラエルに入ってほしい。その時 中東問題の原点が見える」と上人は繰り返した。掲示板に言葉も残した。

が、若い人たちは誰一人 平和行進に参加しようとはしなかった。団体行動はもうたくさんだ、と。もともと自由に生きることがモットーの世代、そしてその世代の代表的な人々でもあった。

結局、日本を出国する前から時間さえ許せば参加を熱望していた私のほかは、コミュニケーションで上人と共に暮らす下田氏、そして上人の願望を斥けては悪いと感じる四十代後半の長島さんだけが加わるようになった。世界の平和運動家と歩きながら語り合うことは、若い人たちにとって多分大きなプラスになるだろう、と私は思ったが、むりにすすめることはできなかった。

私は、「平和行進」というアイデアそのものが気に入っていたが、最初の宿泊地がベドウィン部落ということにも心をそられた。掲示されている予定によると、イスラエルに入国して、まずジェリコの学校に行く。そこに十五、六人のパレスチナ人とイスラエル人が待っている。その人たちと共に歩いて、夜はベドウィン部落で交歓。テントを張って自炊することになっている。

三十一日早朝、同室の二人にメモを残して出かけた。「ベドウィンの星空が見たくて行って来ます」

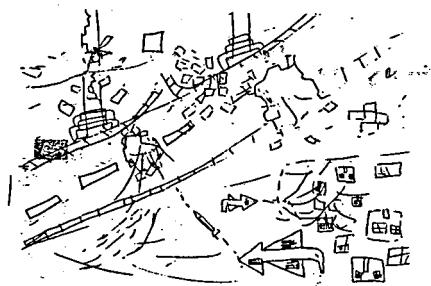
ハ エ

ムスリムの国々の地図には、イスラエルは存在しないことを、ヨルダンに来て初めて知った。私たちがイスラエル領として記憶している地中海沿いの細長い一帯は、パレスチナであり、ヨルダンであり、シリアであり、レバノンである。私たちの呼ぶイスラエル国境は、ここではオキユパイド・ボーダーと呼ばれている。

ヨルダン峡谷沿い、緑に包まれた国道を走ってそのボーダーを抜けると、風景は突然灰白色に変わる。灰白色と呼んでいいのか、灰色に薄いピンクとホワイトを少々混ぜたような、今まで見たこともない色の山々と道は、一点の緑もない。カラー映画が突然モノクロに変わったような不気味な印象である。思わずカメラを構えると、「写真を撮るな!」、運転手が振り返って厳しい目でにらんだ。灰白色の丘の上に、マシンガンの兵士の姿が見えた。

入国管理局の建物の前で待たされる。

ジリジリと強い陽が照りつける。ふと見ると、荷物の上に、隙間もないほど真っ黒に小バエがたかっている。追っても追っても、ハエは逃げようとしなない。私は幼い日、父から聞いた話を思い出した。清朝時代の吉林の調査に行った時のこと。ごはんの上に真っ黒に小バエがたかって、追い払いようがない。しまいには、ハエをゴマと思って食べることに



した。なに、ゴマと思えば食べられるものだ、と父は笑ったが、二十一世紀もまもない地中海沿岸、中東随一の空軍力とハイテクを誇るイスラエルでハエに出迎えられるとは……。なに、ハエ模様、と思うことにしよう、と、私は苦笑した。

荷物のチェックは聞いていたとおりの厳しきで、待ち行列は遅々として進まない。寝袋の奥に隠したカメラが気になる。カメラは不可、と聞いていたが、税関に取り上げられたらそれはそれ、と、思い直して急いで持ってきたのだが、撮るな！と言われた時、思わず隠したのだ。検査ぶりを見てみると、ごく小さな袋類まで逆さに振って中身を逐一調べている。寝袋の中も、もちろん点検される。AGPTVの団長格のベルギー人、ジャンは、書類をすべて破り棄てられた。

今さら隠し場所を変えるわけにはいかない。私は男女二人の検査官のうち、少しは検査がゆるやかに見える中年男性検査官のほうの列に並び変えた。

順番が来た。

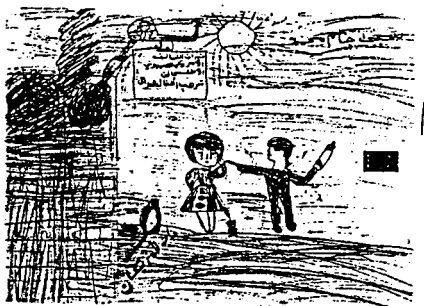
「カメラは」

「一台持って来ました」

「写しなさい」

「では、あなたのお姿を。はい、チーズ」

わざとふざけて言う、彼は笑って天井を指さした。



シャッターを切ると、検査は無事に終了した。

“女は度胸”をキャッチフレーズにしている私だが、胸の鼓動が聞こえるのではないかと、この時ばかりはポーカー・フェイスを装うのに苦労した。

西岸で

ジェリコのアメリカンスクールには、予定どおりパレスチナキャンプの人々と、地元のパレスチナ人が待っていた。西岸のパレスチナ人のまとめ役という熟年の紳士が、今までも過酷な抑圧状態に置かれていたパレスチナ人の状況が、今度の湾岸戦争でさらに非常に悪化したこと、自分の職場や自分の田畑への外出もままならず、職を失い、田畑は荒れ果て、暮らすのにも困っている状況を切々と語った。マシンガンのイスラエル兵が見張って、暮らすのにも困っている状況と語った。マシンガンのイスラエル兵が見張って、パレスチナのゲットーにいてのと変わらない状況だ。その間にソ連や東欧からの入植者が着々と進んでいる。入植者の家を建てているのは、皮肉にもパレスチナ人。自分の首を絞めるようなものと知りつつ、ほかに食べる手段がない今、悲劇的な労働に従事している、と。

AGPTVを代表してインドの女性弁護士、アリサが、パレスチナこそ中東問題の原点であること、その問題の解決のために、自分たちは死力を尽くす。第一歩としてエルサレムまで非暴力の平和行進をする。皆さんもさぞかし大変と思うが、ここは非暴力に徹するほかない、と熱っぽく語った。

アリサの言葉は、逐語訳のアラビア語で伝えられた。

別室には、ホブズにジュース、オレンジ、サラダ……、心づくしの立食式昼食が用意されていた。私は皿に盛ると、パレスチナの人たちと一緒に食事を、と彼らの部屋に移ったが、彼らは食事を採らず、私にどこからかバナナを三本、運んでくれた。共通の言語がないことが互いにじれったかったが、その人たちの顔を見ているだけで、心が温かくなった。

深い悲しみ

パレスチナ人リーダーの逐語訳をしていた、白髪を無造作に後ろに束ねた、どこか、むのたけじさんに似た老人は、パレスチナ人ではなく、イスラエル人とわかった。

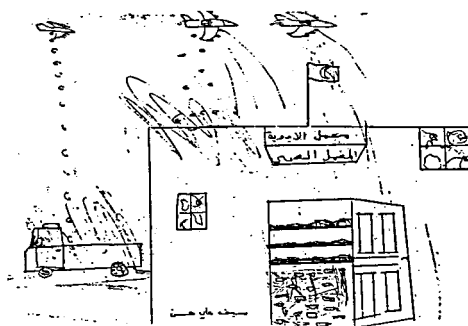
ポーランド生まれ。五歳の時までナチスのゲッターで過ごし、一九四八年、イスラエル建国の時からエルサレムで暮らしてきたという彼は、ぼつりぼつりと話し始めた。

「この国は悪い国です。実に悪い国です。ヒロヒトの国より悪い」。

「悪い」を何度も繰り返して、吐き出すように言った。

「建国の中心理念をシオニズムに置いたことが、取り返しのつかない失敗だった。私たちの理想は破れた。これからは、もっと悪い国になるのではないか。憂慮に耐えない」

しわ深い顔の、細い目を閉じた時、彼、カルーラ氏はカタコンブのキリスト受難像のように見えた。



「なぜ、もっと悪くなるのですか」

「今の教育が恐ろしい。徹底的な選民思想を子どもたちに叩き込んでいる。あの子たちが大きくなった時は……」

その先は言わず、もう一度言った。

「悪い。実に悪い。徹底的な排他主義です。ユダヤの血の純潔を厳しく守らせようとする。ナチの血の純潔と少しも変わらない」

「世界制覇の思想です。そして今、世界の中枢をシオニストが占めている。中でもアメリカの財界、政界、ジャーナリズム、そしてマフィア……」

世界のいくつかの国を旅して、いろいろな人に出会った。自国の悪口を言う人は、世界のどこにでもいた。しかし、こんなにも、愛と悲しみと怒りの混じった言葉を聞いたことはなかった。

ヨルダンでもイラクでも、何人もの人々から聞かされた。

「私たちはユダヤ人が嫌いなのではない。アラブはユダヤと何千年も共存してきた。ユダヤ人が世界で一番住みやすかったのがアラブ世界、中でもパレスチナだ」

そして、その後につけ加えたことばも同じだった。

「ユダヤ人は嫌いじゃないが、シオニストは許せない。いま、世界のあらゆるマフィア、あらゆる売春組織、あらゆる財力、権力、あらゆるマスメディアは、シオニストの手に握

られている」

……そんなにまで悪く言わなくてもいいではないか、すぐれた科学者、音楽家、画家……ユダヤの文化人は数知れないではないか、と、次々に名を挙げると、むきになって反発した。

「ユダヤ人は嫌いじゃない。シオニストが怖いんです」

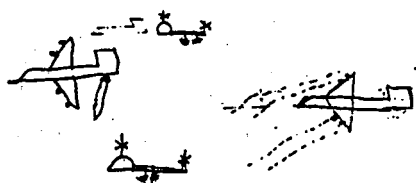
アラブでは、シオニズムの本が山ほど出版され、その怖さを、みんな知っている、という話も聞いた。アラブで聞く話は割引きして聞かなければ、と思いつながら耳を貸したが、イスラエル建国の時からかわった、誠実そのもののような老人が、深い嘆きと憤りに包まれているとは。

しかし、少なくとも、この国では、他人の同席する部屋でそれを言う自由がまだある。私は、それを見続けたいと思った。

人 質

昼食の途中に、ヨルダンから歩き続けてきた寺沢・松脇上人と、もう一人、見知らぬ細身の上人が到着した。

「堀越です」と自己紹介した三十少し過ぎと思われる堀越上人は、イスラエル国内を巡礼して歩いていたら、陽焼けした顔に白い歯を見せた。



法鼓が三つになった。下田さんが寺沢上人の仏舍利を持ち、長島さんと私は小さな横断幕を持った。「ピース・ピルグリム(平和巡礼)——アンマンからエルサレムへ」、胸のおどる文句だ。

歩き出そうとした時、マシンガンの軍隊が、数台のジープで私たちを包囲した。

総司令官命令、行進は絶対許さない、と言う。

宗教者は世界のどの国でも自由に歩けるはずだ、と寺沢上人は憤慨して激しく交渉した。「在家の方はご遠慮ください」、……結果は、三人の上人だけが巡礼を許された。

三人の打ち鳴らす太鼓の音は、乾いた路上に次第に遠くなった。

午後の太陽が、原っぱに円をつくって相談する私たちへGPTVの一行に容赦なく照りつける。英国人、米国人、ベルギー人、カナダ人、インド人、イスラエル人、それぞれの主張は、お国がらか、個人差か、少しずつ違う。意見はなかなかまとまらない。

非暴力に徹して、ここは穏便に下がったほうがいいのでは、というのは、グリーンナムコモンで徹底的非暴力を貫きとおした英国人のマギー。正義感に燃える弁護士のアリサは、国際法に照らして考えても納得できない、自分が交渉する、と、一步もゆずらない。彼女は四時間近い交渉で粘りに粘って、「一言も声を出さない、隊列を組まない、幕やプラカードを持たない」ことを条件に、やっと歩行許可を取りつけた。

アンマンにいた時から、GPTVの人たちは、ピース・マーチとは言わずピース・ウォークと呼んでいたが、その見通しは正しかった。行進ではなく、バラバラに歩くのだ。

「どんな事態になっても 非暴力に徹すること、仲間の輪から孤立しないこと」と、繰り返し繰り返して注意していたのも、さすがに状況を把握していたのだろう。

「ありがたい、おかげで歩けます」と 笑みをたたえてイスラエル兵に出発の握手をしたアリサは、その手をつかまれてジープで運び去られた。人質だった。マシンガン突きつけられて、私たちは非暴力に徹するほかない。

ベドウィン部落へ向けて、みんな黙々と歩き始めた。ジェリコの学校に駆けつけた地元紙の記者たちは途中で去ったが、一帳羅(いっちょうら)だというピーコックブルーの絹のワンピースに身を包んだ、漆黒の髪、漆黒の目の、私よりも小柄なパレスチナ人、アスワドさんは行動を共にした。そして、イスラエル人の何人かも……。

夕 陽

山道にかかる風はかぐわしくおいしく、心が鎮まってくる。昨春、左足首の骨をいためた私は、テーピングしての歩行だったが、登山靴のはずむ柔らかさが快く、時間さえあれば山に急いだ若い日のように気分がはなやぐ。十数キロで着くのだろうか、行き着く先がベドウィン部落というのもうれしい。

と、突然停止命令。「総司令官命令!」と、トランシーバーを聞きながら、兵士はマシンガンの引き金に指をかける。



五分くらいかと思った停止は、十分になり、十五分になった。小石のさらさらした平地を見つけて、私は背中を大地に伸ばした。高い空にちぎれ雲が白く浮かぶ。

「平和行進だけはやめて。からだがもたない」と、出発前、私をいさめた人の顔。それでも、登山靴もテーピングもリュックに忍ばせて来た。多分、行かずにはいられなくなるだろうと読んだ我が心の動きだったが、マシンガンと兵士は想像のほかだった。

強い陽ざしは、いつしかやわらいでいる。夕方近くなったのだろう。陽のあるうちにベドウィン部落に着くだろうか。

二、三十分もして、やっとゴーサインが出る。山の端に沈みかける真っ赤な大きな夕陽がまばゆい。

まばゆいその陽を、私は見つめ続けた。

目が融けるかと思われた強い光が、見つめ続けるうちにくつきりと輪郭が見え始めた。目がつぶれてもいい。見続けて祈るほかない。見続ければ祈りが通じるような気がしていた。そして見えた。奇蹟のように。

赤い夕陽の沈む野末の石の下に眠った人。

太陽のほかに何もない砂漠の土深く埋もれた人。

日清・日露以来、日本は何と多くの人を殺して来たのだろう。そして世界も。

湾岸戦争の間じゅう、心に浮かんで消えなかったウインストン・チャーチルのことばを思い出す。

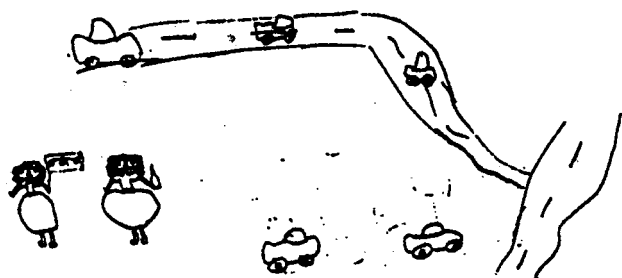
「この戦争(第二次大戦)を何と名づけるかと問われれば、余は言下に『無益な戦争』と答えるだろう。どの時点でも、そして何びとでも、この戦争を停めることができた」

とめようもなかったと信じこんでいた先の大戦をこのように表現した言葉に出会った時、私は涙があふれた。全戦線五千二百万人、うちアジア太平洋地域二千三百万人。それだけの命と引きかえに平和憲法を獲得しながら、ついにまたも参戦した日本。

北と南、東と西、そのクロスする場に立ち、P.L.Oすら自由に入出入りできる唯一の工業化国日本。歴史と非歴史、科学と非科学、その双方を理解できる日本。そして戦争の加害者であり被害者でもあった日本は、戦争を阻止する最先端の位置にいた。

いても立ってもいらなかった。政府が動かないなら、女たちでサウジ国境に人間の鎖を——を、ついに実行しなかったことを除けば、やれることはすべてした。なりふりかまわず行動した。街頭に立ち、署名を集め、国会に日参し、デモは欠かさず、慣れぬ手にマイクを持って街頭スピーチまでした。八月以来、毎月の月刊『あごら』は湾岸問題のキャンペーンに徹した。力のかぎりしたつもりだったが、今一步が足りなかった。——多くの人が死んでしまった今、祈って何になるだろう。そのむなしい祈りしかない今が切ない。思えばこの戦争は二年前から周到に準備されていた。フセインⅡヒトラ―説は、世界にあまねく知れわたり、悪を制する正義の刃が、見事に世論になった。

巨大な戦争のメカニズムに、名もなき民は、素手でどのように立ち向かえるのだろうか。アンマンからエルサレムへ、そのオプティミズムに自ら苦笑しながら、A.G.P.T.Vは歩く。



決して失いたくないオブティミズムを、それぞれの心に言い聞かせながら。

山 道

陽は完全に沈んだ。星のない空。ひたひたと山路にひびく自分の足音だけを聞きながら歩く。イスラエル軍のジープは、前になり、後になり……。

「乗せてあげようか」——横をすりぬけながら、ジープの兵士が私に声をかける。闇深い山路を行く年を重ねた女を気の毒と思ったのか。

「ありがとう。でも、歩けるだけ歩きます。一步一步、歩きながら折っているんです。平和を。戦争しない日を」

（……でないと砂漠の砂になった人があんまりかわいそうでしょう）は、口の中でのみこんだ。

後になり前になりして離れないジープが停まった。また停止命令か。

ジープの中から兵士の声。「缶切りはないかい」

イスラエル人のヤコブがさし出した缶切りで、兵士はラベルのない缶を二つ開け、二つとも私たちに差し出した。

ゆであずきに似たビーンズは、甘すぎず辛すぎず、からっぽの胃にやさしかった。

急な坂道にかかった。

後ろに回ったジープは、ヘッドライトで前方の路面を照らす。照らす光がなければつまずきそうな小石まじりの急坂だ。

「ピープルとピープル、心は通じるのね。ドラマみたいね」——感激家の長島さんは、涙を浮かべる。

坂を登りつめた。

ベドウィン部落だった。

空(そら)の時計

粗末な布を貼り合わせただけのテントが四つ五つ肩を寄せ合っている。ベドウィンの、そこは部落と呼ぶには小さすぎる集落だった。が、テントと夕食の材料を積んで先に着いているはずのワゴンは行方知れずになっていた。

細い木、太い木を混ぜて焚火が燃える。部落ありったけの粉を出し合って、大きなホブズが焼き上がる。そして温かいシャー(お茶)。ベドウィンたちのやさしさに励まされ、火を囲んで語り合おうとした時、九〇フォンを超えるかと思うけたたましさで音楽が鳴り響いた。

テレビだ。



電気も通わぬ山の中。見回すと電源はジープのバッテリー。

イスラエル放送が耳の痛くなる音量でイスラエル讃歌を鳴らし続ける。折れば通じるかと思ったピープルとソルジャーの交流は終わった。トランシーバーを耳にあてた時、それはもはやピープルではなく、したたかな兵士たちであった。

テントの前に、むしろが、マットレスが敷かれる。ベドウィンの子どもたちは、テントから頭だけを外に出して、小さなマットレスの上で、はや、かわいい寝息を立てている。夜を徹して語り合うはずだった私たちも、天を仰いで大地に臥すほかない。空から降るほど見えるはずだった星は、涙に曇ったのか、闇の中に吸い込まれて、かさをかぶった満月だけが中天に鈍く光っている。

旅の最初の夜、モスクワ、クレムリン広場は新月だった。ちょうど半月経ったのだ。ふと、アラブの人の言葉が浮かぶ。「私たちは太陰暦だ。これからも使い続けるだろう。半月ごとに暦がわかる。潮の満ち引きもわかる」

アメリカがクウェート撤退回答の期限とした東部時間一月十六日午前零時は、イラクの時間で新月、そして満潮の夜、と、新聞もテレビも伝えていた。闇の夜は空爆に、満潮は上陸作戦に最適、と『軍事評論家』たちはコメントした。そして、イラクの出した撤退のシグナルは届いたろうと、灯火管制もなかった十六日深夜のバグダッドに、『予定どおり』空爆が始まったのだ。

多少の人情はあろうと傍観していたのは甘かった。これほどの好機を連合国軍が逃すは

ずはなかったと、今になってみればよくわかる。一日遅らせて、イラクがもしも正式に撤退すれば、「中東新秩序構想」も「世界新秩序構想」も、足もとから崩れる。シナリオは一点の変更も許されなかったのだ。

五千年のスパンで考えたイラクは、二百年の近代文明に完敗した。

水・電気・通信・交通、すべての生産設備と糧道を断ち、三十か国が団結して経済封鎖した究極の戦術。フセイン憎しの大合唱がイラク国内で確実に起こるはずだった。

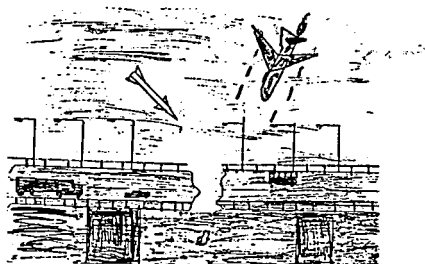
が、東京なら、ニューヨークなら、三日で起きるはずのパニックも、反フセインの怨嗟の声も、ついに生じなかった。

川の水を汲み上げて飲む人たちは、大きな素焼きの壺にそれを満たしていた。径八十センチほどのその水がめの底には、一・五センチくらいの小さな取水孔があいている。素焼きの土器で濾過して不純物を濾す、五千年来の知恵は、まだ民衆の中に生きていた。

食べられる草を選ぶ目、毎年のラマダーンの断食で鍛え続けた忍耐力と、乏しさを分かち合う愛。砂漠の民は、勁(つよ)かった。

天の恵み、地の恵みはもとと乏しい。すべてを神の御心にまかせ、手を伸ばして求める代わりに、「明日は明日」と不条理の世界を静かに耐える人びと。

五〇〇パーセント成功した超近代情報化戦争唯一の誤算は、人間の、他民族の、こころをインプットできなかったことだろう。



この戦争の間じゅう、チャーチルとは違うもう一人の英国人、H・G・ウェルズの言葉を私はずっと思い続けていた。「アラブ人と中国人は、いつの日か必ずもう一度、歴史の舞台の主役になるだろう」

天安門で挫折した中国、フセインと共に敗れたイラク。光は遠のいたように見えるが、新しい芽が生まれるための、大きな試練と信じたい。

それにしても、まもなく訪れる四十度、五十度の猛暑。医薬品も食糧も尽き果てたなか、砂漠の民は、伝染病の猛威に耐え得るだろうか。

テントがないのを幸い、私は終夜、月を仰いで物思いにふけた。

満ちては欠ける月のように、人間はこれからも愚かな戦いを繰り返すのだろうか。そういう愚かな人間の、戦争の技術だけは確実に残忍・残酷の度を増していく姿を、月は空高く、どんな思いで見ているのだろうか。

中天の月は、いつのまにか山の向こうに隠れようとしていた。突然、昔読んだ古典の意味が、頭の中を光が走るように理解できた。「月は山の端に傾きて、はや卯の刻近しとなん思ほゆ」——空は大きな時計だったのだ。山稜に近づけば四時、隠れてしまえば六時。平安の人のように、アラブの人々は、自然近く呼吸していた。

考えてみると今夜の満月は、西行の詠んだ『その如月の望月』だった。日本はいま花の盛りだろうか。文字の上、ことばの上だけで知ったつもりになっていた数々のこと。これ

から私はどれだけ眞実を理解していけるだろう。多くの日本人がそうであるように、私はアラブについて、文明について、何を知っていたのだろうか。たとえばこの月のことも…。

月満ちるころ、女には月のめぐりが訪れ、赤ん坊は呱呱の声をあげる。月が隠れ、潮が引く時、人は静かに息を引き取る。西行の言った「望月」の背後には、潮引く刻に静かに逝く願いもこめられていたのだろう。私たちは太陽暦を導入して、それを文明の象徴としたが、それはまことの文明だったのだろうか。

十字を嫌って、ムスリムが新月を象徴とするのは、今も激しい十字軍への拒絶の姿、と西欧社会は解するが、幾何学的な十字に象徴されるデジタル思考よりも、次第に満ちて次第に欠ける円のアナログが、ムスリムの思考の基本にあるのではあるまいか。

思えば二十世紀は、戦争と石油の世紀だった。二十一世紀には、石油とともに戦争も終わりを告げるだろうか。この石油と軍需の利権戦争は、罪深い二十世紀の葬送歌だろうか。チャーチルが生きていたら、「史上かつて経験したことのない奸智にたけた狡猾きわまらない戦争」と表現するに違いないこの戦争。どの時期、どの国でも防止できた戦争を、ついに私たちは、防ぐこともとめることもできなかった。人類はいっそ絶滅に瀕して、原点から生き方を問い返せ、と、神は警告しているのか。

空はしらじらと明けかかった。明日もピース・ウォークは拒絶と困難にさらされるだろう。でも、まずは歩こう。歩いて祈るほかない。

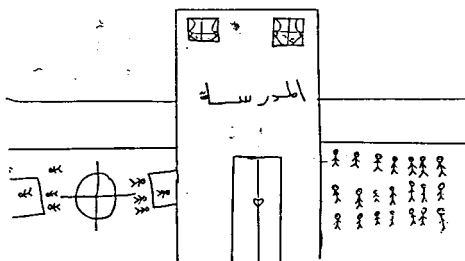
枕もとで羊たちのフンが、微かに香った。

あとがき

イラク大使館であわただしく書いたビザ申請書。それがイラクに入る第一歩だった。申請書には実父の名、続いて実祖父の名、そして夫の名を書かねばならない。既に世に亡い三人の男たちの名を次々に書きながら、イラクは今も父系社会だろうかと思った。

アラブの土地に入って、イラクでもヨルダンでもパレスチナでも、自分の名の次には父の名、そして祖父の名、場合によっては出生地名を示すのが常で、自分の名の前に子アル・テイクリティは「テイクリティの人、マージットの孫にしてフセインの子なるサッダーム」の意味だという。女の場合は、何々の母にして何々の娘、何々の孫……、となるが、結婚しても姓は変わらない。戸籍をつくらないアラブでは、父祖の名を名乗ることが、一種の身分証明になっている。その父祖の名にかけて、不正不義を行わない、というのもアラブの伝統という。こういう基本的な知識さえも、私は持っていなかった。歴史や地理を、私たちは西欧の研究を基に学び、左手にコーラン、右手に剣、と信じてきた。アラブの人たちは、それは左手にバイブルを持った人々のつくり話だと言う。

アフリカにはアフリカ人の手で明らかにしなければならない歴史がある、と、かつてエンクルマは言ったが、知識という名で刷り込まれた偏見を削り落とすことから、何かを知



る、という作業を始めなければなるまい。それに改めて気がついたことが、今度の旅の最大の収穫だった。

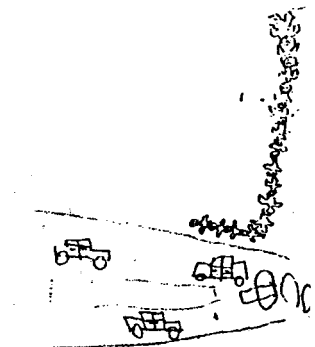
イラクに行くことを告げた時、いくつかの新聞社、雑誌社から原稿を依頼されたが、私は書く、という約束はしなかった。書くという前提を持たない市民の真っ白な目で、現実を見、そのありのままを、同じ市民として湾岸戦争を苦しんだ仲間たちに伝えたいと思ったのだ。

しかし、現実を伝えるとは、なんと難しいことだろう。たとえばカルバラ攻防戦の跡に立つと、つい破壊された商店をカメラに収めたくなる。それを連続して見せれば、「カルバラは瓦礫の山」と理解されるだろう。少し引いて眺めた全景は、それとは明らかに違う。意識的にせよ、無意識的にせよ、自分が情報を切り取っていく怖さをまざまざと感じた。それが第二の収穫だった。

今度の旅で、日本のテレビや新聞から得ていた情報と現場との違いを具体的に感じた。恐らくこういう違いは、どの情報にも共通していることで、現場と完全に一致する情報はあり得ない。百人の発信者がいれば百通りの情報になるのも当然のことである。私が気になったのは、当然多種多様になるはずの情報が、ほとんど横並びだったことだ。

一月、二月の新聞を読み返してみると、その多くがカイロ発、テヘラン発であり、あるいは、ロイター、AP電で、日本のオリジナルな情報は、ごく稀なのに気がつく。

日本人は、日本の名だたる新聞や放送局の情報にもまして、ロイターやBBCをほとん



ど無条件に信じるが、もしかしてこれは、添加物入りの食品を知らずに食べているようなものではないだろうか。

戦時下の現地情報へのアクセスの難しさは容易に想像できるが、アクセスできなかったのは、イラク側の情報管理の問題だけではない、もっと巨大な別の要素が働いていた可能性も考えられる。九十億ドルの支出という日本の選択は、日本の国民が考えていたよりもはるかに大きな大問題だったのでは、と思う。

九十億ドルを支出した、ということは、情報についても西側情報ネットワークに完全に組み込まれることだった。従来から、日本の情報は西側情報だったが、もしも中立路線を貫いていれば、もっと多角的な情報を入手でき、伝達もできたのではあるまいか。

この戦争中、西側情報ネットワークは、“アラスカ沖の水鳥の映像”に象徴されるように、完全な戦時体制ディスプレイ・フォメーション・ネットワークだった。

情報を受ける側の大衆は、戦果に関しては、“大本営発表”と思いながら受けとめるが、予期していない情報、たとえば、サダム・フセインⅡ ヒットラー説のたぐいは不用意に受け入れる。例の、金を出して兵を出さないという批判が海外で起こった時、国際電話でどなってきたアメリカの友人がいた。フセインは化学兵器で五百万人もクルド人を虐殺した。そういう悪を滅ぼすために、なぜ日本人は立ち上がらないのか、と。私はクルドの人口はどれくらいか、とたずね、次に言った。自分は東京大空襲で十万人が一夜にして焼

き殺されるのを見たが、十万人の人が死ぬというのはどういふことか、想像できるか、と。少し落ちついて考えれば兎戯に類するディスインフォメーション(意図的な誤情報)を、相
当なインテリまでが信じてしまう情報操作こそ、戦争準備・戦争促進構造だろう。

二年にわたってフセイン悪人説は欧米のメディアによって徹底的に流されていた。

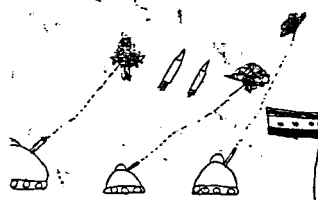
米国を中心とする連合軍を、日本のジャーナリズムは「多国籍軍」と呼んだが、それは
いみじくも多国籍企業を背景とするネットワークを示唆しており、その背景に立って着々
と戦争は準備されていた、とも考えられる。

意図的な西側情報世界に氾濫していた反面、イラク、——米国一国と比べただけでも、
領土は二十四分の一、人口は十七分の一にすぎないイラクが、世界三十か国を相手に、負
けることが明白な戦いを、なぜ退かなかったかという分析は乏しかった。そして開戦と同
時に、プロレスを見る感覚で、世界中がテレビ・ハイテク・ショウを観た。

即時停戦の署名を集めた時、ある人が言った言葉が忘れられない。

「毎晩見ているうちに、弾丸の向こうにいるものが悪で、こちら側が善。もっとやれ！
という気になってきたのが怖い」

物心つかないうちから戦争。そして「大東亜戦争はアジア解放の聖戦だ」と教えこまれ
て育った世代の私は、大人になっての戦争は、どんなことがあっても未然に発見し、防が
なければ、と思い続けてきた。それが成人の責任だとも。



戦後四十六年、日本の平和は簡単に守られてきたわけではない。何度も風化しそうになる憲法九条を守るために、どれだけたくさんの人々のたくさんの努力が重ねられてきたかわからない。湾岸戦争は、それを一挙に吹き飛ばした。

日本が基地を提供した戦争として朝鮮戦争もベトナム戦争もあった。しかし、今度のように日本が主体的にかかわった戦争ではなかった。九十億ドルを提供した時、日本は自ら憲法九条の変質を準備したのである。掃海艇、PKOと続く一連の動きは、その目的がどこにあったかを明白にした。戦費を支出するかどうかは、国民投票にかけなければならぬ重大な問題だったと思う。

その準備に立って、今、次から次へと既成事実がつくられようとしている。ちょうどイスラエルの占領地にソ連や東欧からの入植者の住宅が着々と建設され始めたように。

ひとたび既成事実が作られるとくつがえし難いものとなるのは、消費税の例でも明らかである。今、掃海艇・PKOこそ国際的貢献への道だという世論がいつのまにかつくり上げられようとしているが、本当の貢献とは何だろう。

平和のための貢献は、戦争防止が第一であることを、まず何よりも強調したい。今度の戦争を防止するために日本が東奔西走していたら、世界の、国家はともかく、民衆は、日本に拍手を送ったろう。今後とも日本の果たす役割はそれ以外にはあるまい。

イラクは今、法外な賠償金を請求され、なおかつ経済制裁を解除されずにいる。戦勝に

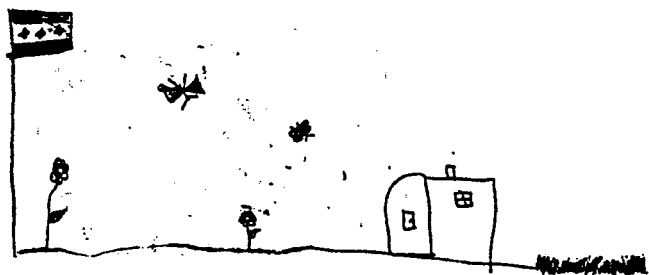
よって巨利を得た国が、さらに賠償金によって富もうとする構図に憤りを覚えてゐるのは私一人ではないと思うが、西側にくみすることを表明した日本は、抗議の声すらあげることはできない。もしも賠償を受けるに値する国があるとしたら、それは出稼ぎ先を失ったアジア・アフリカの国々であり、地球汚染の結果を負うすべての地球市民だろう。始めなくてもよい戦争を始めた国は、勝ったことによってその責任を免除されるのだろうか。

また、「フセイン政権が続くかぎり 経済制裁を解除しない」という主張は、明らかな内政干渉ではないのか。

経済制裁の見直しは六十日ごとに行われるが、四十度五十度の猛暑の中、毎日、数百の乳幼児の生命が奪われており、さらに伝染病の加速度的な蔓延が懸念されている事実を、国連加盟国である日本は黙視するのか。ハーバード大学の調査団は、このままではイラク国内に十万人以上の死者が出るだろう、と警告している。

日本政府は、西側諸国の行動を無条件に追認して、西側への忠誠と連帯をできるかぎり示そうとしているが、それを受けとめる側が喜ぶどころか不満をつのらせることもあるのは、戦費の例でも明らかであろう。

東西の冷戦は、東と西の力が拮抗するかぎり一種の戦争抑止力として機能したが、その冷戦の終わりは、南北の緊張を強める結果となった。力の均衡のない南北の緊張は、いつ、どこでも戦争を誘発する危険性をはらむ。北の側が連帯して南を粉砕した今度の戦争の



二次効果を、私は深く憂えずにはいられない。

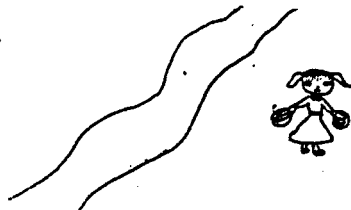
大国が周到な情報作戦を展開して連帯したとき、どのような国もそれに抵抗できない現実を湾岸戦争は見事に示した。「次の標的は日本」とささやかれる今、予算面では世界第三位と言われる軍事力だけで国土を自衛できるのか。世界の森林を伐採し、経済侵略、文化侵略を続ける日本、ODAに金は出しても人は出さない日本、国内にさまざまな差別や非民主性を温存する日本が侵略されても、世界の世論は日本を守り抜くだろうか。

政治力なき外交力なき軍事力なき日本が生き残れる唯一の道があるとしたら、改めて、永世中立と非武装を誓い、徹底的に芸術文化を磨き、「南」と言われる国々に貢献できる科学力と情報力を備えることではないかと私は思う。

人と地球にやさしい社会を築き、文化と芸術の伝統に立って、すぐれた科学で、病む人々を救い、砂漠を緑化する日本、そして公正・中立な情報を発信する日本であってほしい。

公正・中立の立場に立った時、日本の情報力は貴重なものとなる。AP、UP、ロイター等々、世界の巨大メディアの情報だけでなく、辺縁と言われる地方の情報も漏れなく受信し、それぞれの発信地のニュース・ソースのクレジットを入れて送信する日本の情報が、世界で最も信頼できる、と思われるようになった時、日本は、世界の信頼を得るだろう。

この場合、情報機器とか情報処理能力も問われるが、それにもまして重要なのは、辺縁の地と言われる地域にも人脈があり、血の通う情報を入手できると、その言語を理解



する能力であろう。そして受発信した辺縁情報に対応する行動が伴うことだろう。

私は自衛隊を縮小して、その性格を変え、国内外の救援専門隊とすると同時に、縮小した分の費用を、アジア・アフリカ諸国の援助と、文化・芸術の発展、科学の研究開発に充て、青少年を海外のあらゆる地域で研修させることを提案したい。

たとえばアラビア語は、その使用人口から言えば決してマイナーな言語ではないはずだが、日本でそれを理解する人がどれほど少数だったかは、今度の戦争報道でも露呈された。中東の情報をもっと日本に入っていたら、日本はもっと的確な行動をとれたらう。

世界の人々が字ぼうとしない希少言語の専門家も日本には存在するようになると同時に、みずみずしい感性を持つ世代の人々が、世界各国の民衆と直接ふれあうことは、日本が他国を理解する上でも、他国が日本を理解する上でも、大きなプラスになるだろう。ピープルとピープルのネットワークこそ、戦争の抑止力と信じる。

一人ひとりが地球市民としての自分の顔を持ち、国や権力が何と言おうと、一人ひとりの責任で、自分の生きる空間を守り、地球を守るとき、ほんとうの意味のボーダレス時代の平和は生まれるのではないだろうか。

(一九九一・六・六)

スライド
かついで
伺います

百聞は一見に如かず。ぜひお目にかけてスライドです。交通費実費さえいただければ、どこにでも伺います。ご連絡ください。五六人の小グループの方もどうぞ。(斎藤千代)

(現在、盛岡、仙台、名古屋、大阪、広島、福山、松山、長崎、福岡、沖縄に伺う予定です)

ガブリエラと交流しましょう！

フィリピンから二人の女性がやってくる

かつて、フィリピンは、日本が侵略した歴史があります。現在はどうでしょう？

日本企業が進出し、豊かな資源を奪い女性を性の道具にして侮辱しています。

フィリピンでは民族が他国の支配から抜け出すことと結びつけて女性の解放を実現しようと運動を発展させています。

日本では自衛隊の掃海艇が派遣され、戦争の足音はいっそう近づいています。アジアの女性同士の連帯をつよめ、しっかりと手を結びあいましょう。

◇リサ・マサ

ガブリエラの副事務局長。33歳
フィリピン大学卒業後、フィリピン研究センターで働く。婦人世界会議など国際会議にも出席。

◇リタ・マリアノ

アミハン（全国農村婦人会議）書記長、31歳。中部ルソンの農家出身で、多くの農村婦人を組織する活動をおこなう。

ガブリエラとは

ガブリエラとは、〈改革・正義・平等・リーダーシップと行動のために婦人を組織する総連合〉の頭文字です。1984年に結成され、農村婦人組織アミハン、都市貧困組織サマカナ、婦人労働のKMKなどさまざまな女性たちで構成されています。

女にも力があることを教え、差別の歴史、現在の貧困がどこからくるかを学んだり、多彩な活動を行っています。

ガブリエラと交流集会の日程

6月15日（土）北九州	戸畑中央公民館	午後6時半～
16日（日）福岡	博多労働会館	午後1時～4時半
18日（火）佐世保		
19日（水）宮崎	宮崎市総合体育館大会議室	午後7時～
22日（土）沖縄	首里公民館	午後2時～
25日（火）東京	東京南部労政会館	午後6時半～9時
26日（水）川崎	川崎市中小企業婦人会館	午前10時～12時
	横浜 県政総合センター	午後6時半～9時
27日（木）京都	京都商工会議所ホール	午後7時～
28日（金）大阪	エル・おおさか（府立労働センター）	午後6時半～
30日（日）山口	山口市労働者福祉文化中央会館	午後1時～

この交流集会の他、来日されるフィリピンの女性たちは農村、工場、学校、診療所などの参観、長崎の被爆地、沖縄の戦跡、米軍基地の参観と交流などが行われます。

問い合わせ・詳細は ☎0832-31-5881 ガブリエラと交流する会
〒750 下関市田中町12-8

九一年拠点会議の報告

へあごらへは今なにをやらなければいけないのか…。

移り変わる時代の中で、"女たち"の生き方は多様化されている。

今の私たちの生き方を見つめ直し、時代を洗い出し、北から南までの仲間たちを大切にしながらへあごらへの今を語り合いたい。

九一年拠点会議は、五月十八日午後、新宿御苑のへあごらへ編集室で開かれた。各地から駆けつけてくれたへあごらメイト"たち。狭い編集室は、生きの良い女たちの熱気でムンムン・ギシギシ。夜遅くまで熱い思いやこれからへあごらへについて語り合った。

参加メンバーはへあごら九州への福田さん、へあごら松山の奥川さん、深見さん。へあごらBOCの高橋さん、加藤さん。へあごら新宿の池田さん、

桑原さん。事務局より斎藤、倉持、荒木、前林、菅原。"読者"の遠藤さん。

あいかわらずの赤字経営が事務局から報告され、へあごらへもついに多角経営の時代を迎えるべきかいなか、さまざまな助言が飛び交った。しかし、やはり編集で勝負したいということでバラエティーに富みつつも中身の濃い企画案が次々と出され、明るい見通しとなった。

教育、人権、性、情報、その時々々の女性問題、世界情勢と取り上げることはいくらでもある。とりあえず、月刊『へあごら』の編集は、十月・松山、十一月・新宿、十二月・九州、一月・新宿、二月・東海が担当と決まった。

へあごらへ編集部では、各号にフレッシュな記事、生々しい情報を盛り込み、魅力ある雑誌にしたい。
読者の皆様もぜひアイデア等お寄せください。

あごらのあごら

〔新入会員〕

◆何げない運動にしようの四項目、とてもいいなと思いました。どうぞ、よろしく。(小田原市 宮崎真由子)

今年もやります！

地球村でのダベリング合宿
自分を探しながら、本音で語り合いましょう。

91・11・30(土)午後2時～
12月1日(日)午後3時まで
場所：多治見市三の倉猪場37

「地球村」

☎0572-2413212
JR多治見駅からタクシーで
約二千元くらい

参加費：食事付 二千元
宿泊者 五千元

問い合わせ：加藤栄子
☎0572-6815010

へあごらは、ギリシャ語でへひろばの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうへひろば。さくのないへひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年二回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなたの自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(月額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あごら 164号 1991年6月10日 発行

●編集 あごら新宿

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 <あごら>企画会議 定価 680円(660円+税20円)

